100

1908−2008

中城村制施行100周年記念誌

Nakagusuku village ◆ 100th Anniversary

百年の軌跡



1908−2008

中城村制施行
100周年記念誌

百年の軌跡

Nakagusuku village ◆ 100th Anniversary

思い出のアルバム



百年の軌跡

Nakagusuku village ◆ 100th Anniversary



昭和7年、中城城跡内にあった村役場

思い出のアルバム



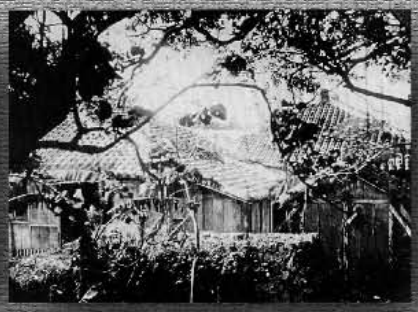
久場崎海中桟橋

戦後、海外引揚者のほとんどが故郷への第一歩をこの海中に突き出た“浮き桟橋”に記した。



引揚家族第一号　昭和21年

久場崎に上陸した引揚家族。アメリカ軍とキャンプ職員との記念撮影。



中城城跡内にあった中城村役場



引揚者を乗せた日本の駆逐艦　昭和21年

引揚者を乗せ久場崎に接岸しようとしている日本の駆逐艦。佐世保や鹿児島を出発した引揚船の多くは、中城湾の久場崎に寄港した。



DDT処理　昭和21年

引揚者は、まずDDTの洗礼を受けた。写真は頭からDDTを散布される引揚者の様子。



終戦直後の台城と引揚者　昭和21年



シーソーで遊ぶ津覇小学校南上原分校の子供たち。　昭和30年代

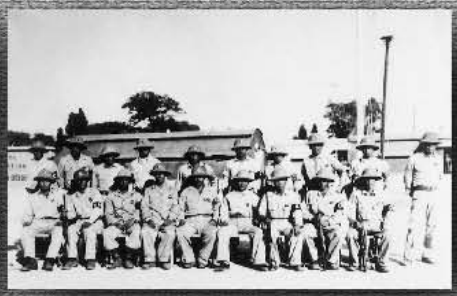
男子と女子に別れて、大勢でシーソーにのって遊ぶ子供たち。



久場崎収容所のコンセット住居　昭和21年
戦後外地などからの引揚者は、大まかに出身地域ごとに収容され、地元に帰る日を待った。



キャンプ内で働く少女達　昭和21年
久場崎収容所で働く、現地住み込みの少女達。



久場崎収容所内の民警察　昭和21年
久場崎のキャンプ内に配属されたCP（民警察）



久場崎　昭和26年
琉球軍司令官ビートーラー少将（写真左）から、カラン曹長に（写真中央）勲章が与えられた時のもの。背景は、1951年当時の久場崎。



資金で津覇小から南上原の通学路を整備（津覇小学校）　昭和37年
高等弁務官資金贈呈式。地図で位置を確認する新垣盛繁村長（前列左）と米国民政府クロフォード教育部長（前列左から2番目）



中城中学校の新校舎上棟　昭和24年頃

思い出のアルバム



米軍よりおくられたすべり台で遊ぶ子供たち
昭和36年



中城城跡公園に遊園地があった当時
昭和30年代撮影　沖縄県教育委員会提供

県観光当局資料によると、昭和50年入込客数の多かった場所は平和祈念公園で年間約161万人、第二位が中城城跡公園で約120万人で県内有数の行楽地として家族連れで賑わった。





アメリカ軍との共同作業
（昭和36年）

アメリカ軍809部隊の技官と村民が共同して中城幼稚園へ続く車道を整備している。アメリカ軍との共同作業で公共事業が行われることはしばしばあった。

クリスマスプレゼント（旧役場前）　昭和37年







この年アメリカ陸軍通信部隊より中城村の住民に対しクリスマスプレゼントが配られた。米流親善の流れの中、各地で同様の行事が行われていた。



健康優良児表彰の写真　昭和39年
検診結果が一定以上の乳幼児を村が健康優良児として表彰していた当時の写真。



当時の中城小学校校舎　昭和38年
手前の建物は図書館、後ろに見える二階建ての建物が中城小学校の校舎



津覇小学校の運動場　昭和38年



アメリカ軍より運動用品のプレゼント
昭和45年
中城中学校の生徒達にバッドやグローブなどがプレゼントされた。



敬老会　昭和30年代後半
村役場の2階は当時フロアとして敬老会や成人式が行われた。

思い出のアルバム





中城村役場前国道。　昭和53年頃



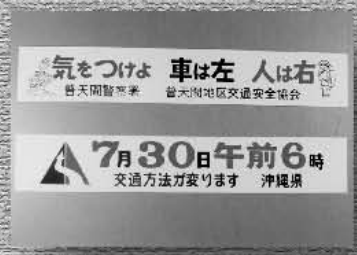
七・三・〇　交通方法の変更　昭和53年頃

本土復帰を象徴する交通方法の変更の歴史的世替わりを「七・三・〇（ナナ・サン・マル）」と呼んだ。



国道329号線（当間）　昭和53年頃

左手にある給油所は、現在は農協給油所になっている。





中城中学校グラウンドで開催された第一回中城まつり
（舞台発表）　昭和54年



第一回
中城まつりの広報パレード
昭和54年（添石）



中城城跡公園内での遠足風景
昭和55年頃



中城村役場　昭和52年

中城北中城消防本部が設置される前は、村役場で消防団を設置していた。消防車の車庫となっているのは、現在の庁舎一階にある総務課あたり。



さとうきびの収穫　（屋宜）昭和55年

昔から、農業が盛んな事で知られる中城。特に、さとうきびは村内各所で栽培され、収穫となると、家族や親戚総出で作業を手伝う。



中城村空撮　昭和56年頃

手前が和宇慶（和宇慶土地改良地内を望む）

思い出のアルバム



返還前の久場崎ハイスクール　昭和55年



中城小学校現校舎建築途中の校門前　昭和55年頃



中城勤労者体育施設水泳プールで遊ぶ子供たち
昭和55年
昭和55年完成したプールで遊ぶこどもたち。（現在の吉の浦公園のグラウンド横あたり）



中城中学校の校舎　昭和56年頃



土地区画整理事業完了直後の久場　平成2年



海外移住者子弟研修生受入事業スタート　平成8年

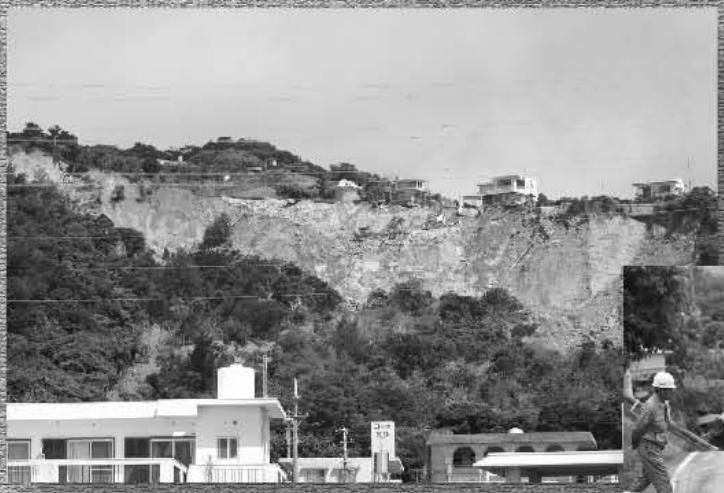


南上原区画整理事業が開始された頃
平成14年



中城城跡世界遺産登録
平成12年





中城村長雨土砂災害発生　平成18年





現在のなかぐすく　平成20年



現在の土砂災害現場　平成20年

歴代の村長



■初代村長
大田為淳（仲順）
就任　明治41年4月
退任　明治45年4月



■2代村長・4代村長
安里徳明（荻堂）
就任　明治45年5月
退任　大正9年3月
就任　昭和3年7月
退任　昭和6年2月



■3代村長
比嘉亀舜（伊舎堂）
就任　大正9年4月
退任　昭和3年6月



■5代村長
伊佐善俊（新垣）
就任　昭和6年3月
退任　昭和9年1月



■6代村長
伊佐常喜（屋宜原）
就任　昭和10年3月
退任　昭和16年6月



■7代村長
比嘉優之（泊）
就任　昭和16年7月
退任　昭和21年4月



■8代村長
比嘉成一（奥間）
就任　昭和21年5月
退任　昭和23年2月



■9代村長
渡嘉敷真睦（屋宜）
就任　昭和23年3月
退任　昭和25年9月



■10代・11代・12代村長
喜屋武盛輝（当間）
就任　昭和25年9月
退任　昭和29年9月
就任　昭和29年9月
退任　昭和33年9月
就任　昭和33年9月
退任　昭和34年5月



■13代・14代村長
新垣盛繁（久場）
就任　昭和34年5月
退任　昭和37年9月
就任　昭和37年9月
退任　昭和41年9月



■15代・16代・17代村長
城間盛栄（北上原）
就任　昭和41年9月
退任　昭和45年9月
就任　昭和45年9月
退任　昭和49年9月
就任　昭和49年9月
退任　昭和51年5月



■18代・19代・20代・21代・22代村長

新垣盛繁（和宇慶）

就任　昭和51年7月
退任　昭和55年7月

就任　昭和55年7月
退任　昭和59年7月

就任　昭和59年7月
退任　昭和63年7月

就任　昭和63年7月
退任　平成4年7月

就任　平成4年7月
退任　平成8年7月



■23代・24代・25代村長

新垣清徳（津覇）

就任　平成8年7月
退任　平成12年7月

就任　平成12年7月
退任　平成16年7月

就任　平成16年7月
退任　平成20年7月



■26代（現）村長

浜田京介（浜）

就任　平成20年7月
～現在

発刊のことば



中城村長
浜田　京介

中城村は、明治四十一年（一九〇八年）沖縄県島嶼町村制度の施行により「中城間切」から「中城村」となり、平成二十年四月一日に村制施行百周年を迎えました。

村制施行百周年の記念事業の実施に際し、村史を紐解き、また村とともに長い人生を歩まれてきた諸先輩方のお話を伺いながら、現在の中城村の姿は幾多の歴史と、多くの困難を乗り越えてきた村民そのものによって培われてきたことを実感いたしました。

村の歴史の中で最も大きな出来事として、終戦の翌年となる昭和二十一年、米政府統治の元での北中城村の分村が挙げられますが、今日においても互いになくてはならない存在であり、消防組合や清掃事務など多くの部分で互いに力を合わせ諸事業を進めております。

また、中城村における百周年は村内だけに留まりません。村制施行の年、明治四十一年にブラジルへの移民が出発して以来、中城村は戦前・戦後の移民送出母村として知られ、現在では南米各国の村人会において中城村出身の方々が活躍されており、また百年を経た現在でも研修制度などを通じて、村との結びつきをさらに深めています。

中城村は古くから「教育村」として知られ、また世界遺産である「中城城跡」をはじめ村内各地に継承されている伝統芸能など多くの歴史・文化的環境と肥沃な農地、自然に恵まれ、また産業、文化、スポーツに多くの人材を輩出するなど、まさに「豊かな歴史と自然に彩られた田園文化の村　とよむ中城」として発展を続けておりますが、これからも都市計画の進展、観光産業と企業誘致の推進など、さらに住みよい生活環境を目指して村民の皆さまとともに歩んで参ります。

この百周年記念誌の中には、懐かしい光景、初めて知る村の歴史、そして将来への展望など、私たち村民の中城村に対する様々な思いが込められております。

一世紀にわたり先達が築いてきた輝かしい村の歴史と、これまで受け継がれてきた文化・教育・産業に対する村民の熱意と勤勉性に感謝と敬意の意を表するとともに、皆さまのますますの御健勝とご発展を祈念し、発刊のあいさつといたします。

平成二十一年三月　吉日

祝辞



中城村議会議長
比嘉 明典

中城村制施行百周年記念おめでとうございます。

中城村が、村制施行百周年を迎え、なお一層の飛躍・発展を期して、ここに記念誌が発行されますことは、誠に意義深く心からお慶び申し上げます。

平成二十年五月には記念事業として、写真展が関係各位のご尽力のもと、盛大に開催することが出来ました。関係各位の皆様のご協力に対し改めてここに深い敬意と心よりの感謝を申し上げます。

顧みまするに、中城村でも、去る大戦で五千人余の尊い命が、犠牲となりました。本村諸先輩方が、戦後の厳しい状況の中で幾多の困難を乗り越え今日の生活を築かれたご苦労に対し深甚なる敬意を表します。

また、平成十八年六月には、思いもよらぬ土砂災害に見舞われましたが、住民あげて復旧に取り組んだ、あの精神的な一体感の感動を忘れることが出来ません。改めて、村民の皆様には日頃から中城村政に対し、種々ご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

平成二十一年一月、中城村は、一万七千人の人口を擁し、発展いたしましたが、激動する社会経済の進展とともに、村民の皆様が求める生活の質や豊かさに対する考え方も、ますます個性化し、多様化して参りました。そのような時代にあって、中城村の皆様が日々御尽力され地域に密着した心温まる活動が、明日の中城村を築き上げる力強い源泉となることと思います。

二十一世紀の到来で、進取の精神に富んだここ中城村の皆様が新しい歩みを重ねていくことを期待しています。村におきましても、産官学連携の下、琉球大学を活用し、歴史・文化を生かした「街づくり」を推進し、村民の皆様が「中城村に暮らして本当によかった」と心から感じていただけるような実りある施策を展開していけるよう、議会と致しましても積極的に支援していく所存であります。

終わりに、中城村制百周年を祝し、わが中城村発展のために、ご協力、ご指導を賜りました村民の皆様、関係各位に対し、感謝を申し上げますとともに、今後なお一層のご活躍を祈念し、お祝いの言葉と致します。

平成二十一年三月　吉日

祝辞



北中城村長
新垣　邦男

中城村制施行百周年誠におめでとうございます。記念事業の一環として記念誌が発行されるにあたりお祝いの挨拶を申し上げます。

明治四十一年（一九〇八年）四月一日の村制施行により中城村として出発以来、百年という記念すべき節目を迎えました。一世紀という長い歴史は様々な変遷をたどり築かれてきたものです。先人達の村づくりへの思いが脈々と受け継がれ、今日のような目覚しい発展を見ることができたものと思います。

我が北中城村は昭和二十一年五月二十日に中城村から分村しましたが、兄弟村として、現在でも消防行政や清掃行政等は共に運営しており、その他の分野においても常に協力関係を築きながら共同歩調を推進しています。

とりわけ、中城村は、世界文化遺産である「中城城跡」をはじめとする歴史、文化遺産と豊かな自然環境に恵まれ、さらには教育・文化・産業振興等へも意欲に満ちた勤勉な村民性が大きな力となり、着実な発展を遂げてこられたことに対しまして改めて敬意を表するものであります。

しかし、近年の地方自治体を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。国の三位一体の改革が推し進められ、地方自治体の財政状況は年々悪化し、住民サービスを維持するのに四苦八苦しているのが現状です。格差社会の広がりに不安をいだきつつも、住民生活に支障をきたさないよう行政努力の強化が求められております。

そのような中、中城村は「豊かな歴史と自然に彩られた田園文化村」を将来像に掲げ、様々な政策が展開されております。基幹産業である農業を中心に、商工業、漁業、観光等多様な産業の振興が図られ、村民一丸となり”とよむ中城“をめざし、活力ある村づくりに邁進されますよう心からご祈念申し上げます。

むすびに、村制施行百周年を契機に、輝かしい歴史と伝統を子々孫々に継承発展させ、中城村の今後の限りないご発展と村民皆様のご健勝、ご多幸を祈念申し上げまして祝辞と致します。

平成二十一年三月　吉日

祝辞



前中城村長
新垣 清徳

村制百周年を心からお祝い申し上げます。

中城村は、明治四十一年（一九〇八年）の町村制施行により、中城間切から中城村に改称し、幾星霜を経て目出度く百周年を迎えることとなりました。

この記念すべき節目に当たり、改めて今日の中城村の礎を築き上げた先人の偉業を称えるとともに、今後の更なる村勢の発展を切望してやみません。

この一世紀に亘る本県・本村の歴史を、太平洋戦争を境に戦前と戦後に、更に戦後を復帰前と復帰後に三区分して概観してみると、先ず戦前の三十七年間は、第一次大戦から太平洋戦争に至る戦争への道をひた走る中で、不況、ソテツ地獄、海外移民や県外出稼ぎ等が、当村の世相をよく表しております。

本村は、県内屈指の移民村であり、奇しくも南米ブラジル・アルゼンチン・ペルーの県人移住百周年と重なった事に深い感慨を覚えます。また本村は、去る大戦において、五千名余の尊い犠牲が払われ、終戦の翌年には、北中城村が分村を余儀なくされたことも、特筆すべきであろうと思います。

次に終戦から復帰までの二十七年間は、米軍統治下にあって、軍事基地建設と土地の強制収用が強行される中、住民は戦後復興と人権回復、自治の確立を求めて立ち上がり、大衆運動が盛んに行われた時期でありました。

また復帰後の三十六年間は、悲願の祖国復帰が実現し、平和憲法の下、日本国民としての地位を回復したとは言え、基地の過重負担、米軍人による犯罪、本土との較差、基地依存経済等の他、戦後処理も不十分のまま、今なお困難な問題が山積しております。

顧みてその道のりは、決して平坦ではなく幾多の困難と試練に耐えながら、教育・文化・生産振興への意欲と堅実で勤勉な村民性が原動力となって着実に発展して参りました。

中城村は、世界遺産の中城城跡など歴史的、文化的遺産と豊かな自然環境に恵まれており、農業を基幹産業とした田園文化村づくりを推進するとともに、積年の課題である財政の健全化に資する企業誘致も急がれています。

近年琉球大学の立地と、土地区画整理事業による都市化の進展に伴い、県下第一の人口増加率を維持しており、また吉の浦火力発電所の立地は、近々本村の財政事情を好転させる画期的な企業誘致であると思います。

百周年記念事業「笑顔が戻った日イン中城」の写真展も成功裏に終わり、これを機に本村の益々のご発展と村民各位のご健勝、ご多幸を心より祈念申し上げ、祝辞と致します。

平成二十一年三月　吉日

祝辞



元中城村長
新垣盛繁

村制百周年の節目にあたり、記念誌を発行されることは、誠に意義深く、心からお喜び申し上げます。

明治四十一年沖縄に、町村制が施行されるに伴い、中城間切は中城村に変わり、間切役場は村役場に、間切長は村長に改称されました。しかしこの制度は、地方自治制度とはいえ、他府県のそれとくらべて、制度づきの差別された特別町村制となっており、町村長、収入役は知事の任命、書記は、郡長の任命で、町村行政は、郡・県の監督下に置かれていました。制限づき町村制の下で、地方行政運営の改善に、関係者のたゆみないご尽力がありました。

明治期以来、中城村の産業は農業が主で、殆どが、さとうきび栽培と黒糖製造、芋の栽培でした。さとうきびは重要な換金策であり、芋は三度の食事に欠かせない作物でありました。黒糖製造は各戸単位に順番に行い、一連の作業は「ユイマール」でなされました。中城村の黒糖生産高は、記録によると中頭郡十一村のうち、常に上位にランクされています。また芋の栽培は、大正期まで平植えでしたが、昭和期に入って、栽培法が畦立て植えに改善され、収量が増加し、生活の向上が図られました。きびしい時代における農家の協同とご努力がありました。

人物に目を移すと、政界では、明治四十二年、沖縄県初の県会議員選挙に当選した字伊集出身の新垣盛善氏がいます。新垣氏は、沖縄県立師範学校卒業後、附属小学校に赴任、雄弁家で屈指の良教員と評され、また県議会では、議会の勇将と呼ばれていたといいます。

教育では、明治三十七年、中城、津覇、喜舎場小学校生徒の出席学力向上に多大の貢献をなされた篤志家、字大城出身の仲村栄保氏がいます。仲村氏は中城村三小学校生徒の、出席学力向上督励のため、表彰状と賞品を送るとともに資金を提供し、三学校区に学事奨励会を組織して、明治三十七年から四十一年間、学事奨励に努められました。

文学では、昭和四十二年、「カクテルパーティー」で第五十七回芥川賞を受章した字屋宜出身の作家大城立裕氏がいます。大城氏は多くの文芸作品を発表し、青少年の啓発に貢献されました。この活動を記念し、平成八年中城村によって、吉の浦会館の庭に大城立裕文学碑が建立されています。そのほか中城村には、教育関係者をはじめ、活躍された多くの方々が、おられることは、申し上げるまでもありません。百周年を契機に、先輩方のご労苦とご活躍に思いを馳せ、今後の村づくりに、村当局村長各位のご健闘を祈ります。

平成二十一年三月　吉日

目次

思い出のアルバム……1
歴代村長紹介……11
発刊のことば
　中城村長・浜田京介……15
祝　辞
　村議会議長・比嘉明典……16
　北中城村長・新垣邦男……17
　前中城村長・新垣清徳……18
　元中城村長・新垣盛繁……19
第一章・中城村のあらまし
　中城村民憲章・村民の歌……23
　中城村章・村魚・村花・村木……24
　位置・面積・人口……25
第二章・中城村のあゆみ
　間切から村に……27
　島嶼町村制の廃止……28
　海外雄飛……29
　写真に見る沖縄戦……31
　中城村民戦没者統計……32
　村非核宣言文……33
　屋取集落……34
　近代中城農業の生産構造……35
　学校教育……37
百周年記念事業写真展
　笑顔が戻った日in中城・セレモニー……41
　写真展……42
　来場者数およびアンケート結果……45
座談会・古き良き時代を語る……47
　知念　清、新垣善基、安里英一
　伊佐　実、仲眞良明、仲松和枝
百年史・年表……57
第三章・中城村の現在
　中城城跡の世界遺産登録……81
　歴史の道「ハンタ道」の整備事業……83
　南上原土地区画整理事業……85
　中城城跡整備事業……87
　吉の浦火力発電所誘致事業……88
　農業・漁業……89
　観光・商工業……90
　村内の伝統芸能・伝統行事……91
　百周年事業実行委員会名簿……93
　編集後記・参考文献……94



第一章
中城村のあらまし

中城村民憲章

（昭和五十四年三月十日　告示第十三号）

わたしたちの中城村は、誇りある歴史と豊かな美しい自然に恵まれ、産業、教育、文化の村として発展してきました。

わたしたち村民は、郷土を愛し村民としての誇りと責任を持ち、みんなの協力によってより明るく住みよい豊かな郷土を築きあげることを念願し、ここに村民として実践していくべき日常生活の信条としての憲章を定めます。

一、緑を育て清潔な住みよい環境の村をつくりましょう。
一、時間ときまりを守り明るい村をつくりましょう。
一、健康で生産に励み豊かな村をつくりましょう。
一、親切で助け合いなごやかな村をつくりましょう。
一、文化を守り育て教養を高め心豊かな村をつくりましょう。
一、青少年をすこやかに育てしあわせな村をつくりましょう。
一、海外雄飛の伝統を守り伸びゆく村をつくりましょう。

中城村民の歌

作詞　新垣秀雄
作曲　田場盛徳

一、うるまの島の　中ほどに
　聳えて立てる　城の跡
　裾にひろがる　うまし野や
　月さやかなる　吉の浦
　とよむその名も　かぐはしく
　ああゆるぎなき　中城

二、教えの道も　一筋に
　照らすかがり火　受けつぎて
　歴史の重み　かみしめて
　のぞみゆたかに　なごやかに
　あゆむ足どり　かろやかに
　ああゆたかなる　中城

三、嵐もなにか　輪になれば
　老いも若きも　はつらつと
　あすへののぞみ　いや高く
　今日のつとめに　目ざめつつ
　とよむその名を　呼びかはし
　ああ栄えゆく　中城

中城村章

説　明

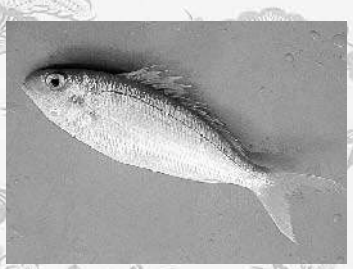
［図形］

円は村民の和を表わし、巴は護佐丸の紋を形どったもので誠実を表わし「中」の字と突出部は、村名と村の発展を表現している。

［配色］

赤色は村民の情熱を表す。
黄緑は豊かで肥沃な緑野を示し、青色は中城湾の海の青、空の青を表し村の美しい自然景観を表現している。

（昭和54年3月10日　告示第14号）



村魚―イジュキン
（モモイトヨリ）



村花―ハイビスカス



村木―クロキ
（リュウキュウコクタン）

中城村の位置と面積及び人口

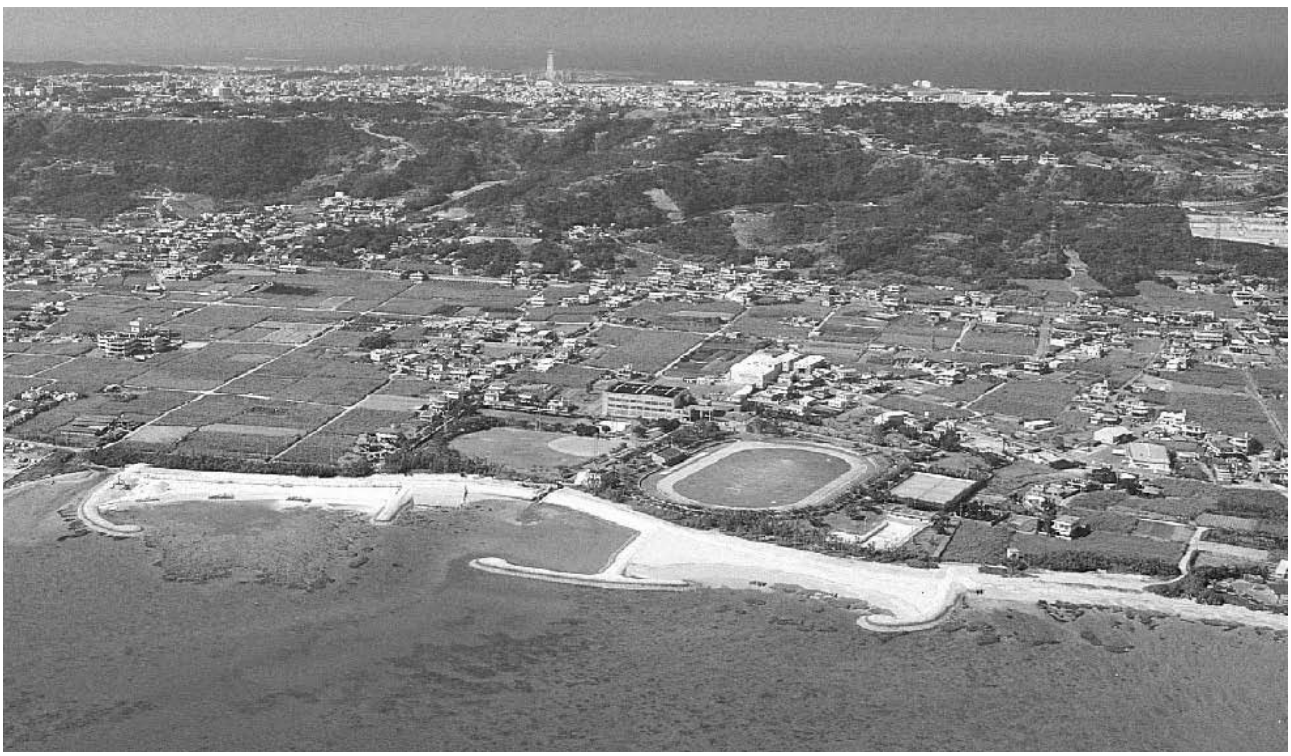
【中城村の位置と面積】

中城村は、那覇から北北東へ16キロメートルの位置にある。東は中城湾に面し、西は宜野湾市、南は西原町、北は北中城村に隣接している。村域は南北に約7・5キロメートル、東西に約3・5キロメートル、総面積15・3平方キロメートルで長方形をなしている。地形は、村の西側にある標高100～180メートル程の台地と東側の平坦地、その間の斜面地の三つに大別できる。



【人口】

中城村の人口は、平成二十二年二月末現在で、二万七〇〇八人となっている。





第二章
中城村のあゆみ

島嶼町村制の実施

中城間切から、中城村に



昭和7年頃、中城城跡内にあった村役場

明治四十一年は、間切という名称が村に改められた年である。

この年の四月一日、「沖縄県及び島嶼町村制」が実施された。これにより間切は村に、村は字に改称された。

明治四十三年は、名実ともに沖縄の文明開化の年であった。

まず、八月一日に沖縄県立沖縄図書館が設立された。他府県のそれより十年ほども遅れはしたが、沖縄文化の維持と創造発展の基盤になったことはいうまでもない。

次に沖縄で電話が設置されたのは明治十九年であるが、その利用は警察に限られていた。しかし、明治四十三年二月には那覇区内に開通し、翌年の二月からは那覇―首里間の電話が開通した。

また、明治四十三年四月二十五日には沖縄最初の電力会社、沖縄電気(株)が創立された。当初は首里・那覇・島尻・中頭の一部地域六〇〇戸に、七八〇灯がついた。その後、点灯数は増加し、中城でも県道沿線を中心に電灯がともされた。

行政区の名称の変更

明治四十年に発布された島嶼町村制は翌四十一年に実施され、これによって間切が村に、村が字に変更されるとともに、従来の間切長が村長に、村頭が区長に改称された。

この島嶼町村制は、他府県の町村制とは異なり、「特別町村制」と呼ばれた。町村自治制度とはいっても、町村長、収入役は知事が、書記以下字の区長は郡長の任免、町村行政は県・郡の強い監督下に置かれた。町村会は選挙制を採用したが、その権限は単に予算を審議する程度に過ぎなかった。

いずれにしても、島嶼町村制の実施によって、従来の中城間切伊舎堂村などの名称は、中城村字伊舎堂などに変更され、行政区の名称は一新した。

その後、明治四十二年には「府県制特例」が実施されて、沖縄で初めて県会議員選挙が実施され、明治四十五年には、他府県に遅れること二十

二年にして「衆議院議員選挙法」が公布、実施され同年五月十五日には第一回総選挙がおこなわれた。

島嶼町村制の廃止へ

大正九年四月一日、島嶼町村制・府県制特例が廃止されて、町村には町村制が施行された。これによって沖縄県も他府県同様の一般自治制が施行されるようになり、本県における地方制度の一応の確立を見たことになる。

近代の中城

画期的な二大事件

近世における薩摩の侵入は、沖縄史上空前の画期的な事件であったが、近代の琉球処分によって琉球王国が滅び、日本の統一国家に組み込まれて沖縄県になったのも画時代的な出来事であった。

琉球処分

琉球国から琉球藩へ

明治五年は、沖縄の近代史に大きな転換を見せた年であり、その代表的なあらわれは「琉球国」が「琉球藩」となり、尚泰は「琉球藩主」となって華族に列せられたことである。

それは明治五年の維新祝賀会に慶賀使節として上京した正使伊江王子朝直と副使宜野湾親方朝方らに通告の形で言い渡されたものであった。

そして、その年の九月、琉球藩は外務省管轄となって在番奉行は廃止となり外務省出張所が設置された。これが琉球処分の出発点であり、やがてその藩も廃止されて沖縄県が成立する。

琉球藩から沖縄県へ

一九七九(明治十二)年三月十一日付で廃藩置県が布達され、三月二十七日、松田道之琉球処分官は、首里城で「琉球処分令達」を藩王代理の今帰仁王子に手渡す。これによって琉球藩は沖縄県となる。四月四日にこれを全国へ布告。

県庁には、他府県に準じて庶務課、学務課、記録課などが設置されるとともに、構内に警察本署と裁判係が置かれた。しかし、沖縄の特殊事情を考慮して六月二十五日には「旧慣温存」の政策が布達された。これは、できるだけ反日感情をおさえ、人心の安定をはかるためには急激な変化を避ける必要から生まれた措置であった。これで間切、島における番所、地方行政機関などは従前のまま存置し、全県を首里、那覇、島尻、中頭、国頭、久米島、伊平屋島、宮古島、八重山島の九行政区域に分け、それぞれ役所を置いて属官を配置して監視させることにした。

中城間切は中頭地方役所の管轄に属し、一六一(慶長十六)年に設置された中城間切番所はそのまま存続して間切行政が続けられた。

沖縄戦

沖縄戦は、立前としては十七歳以上、四十七歳までの男子が防衛隊として守備軍とともに戦闘に参加したことになっているが、事実は十二、三歳の少年や七十歳以上の老人も前線で戦い、女子青年を中心とする多数の婦女子も参戦している。すなわち、戦闘能力の少しでもある県民は男女総力を出し切って、戦場で戦った点に沖縄戦の前代未聞の特質がある。

特に、女子学徒の出陣は世界の戦争史に前例がなかった。

一九四五(昭和二十)年三月二十六日、午前八時すぎ、米軍が阿嘉島に上陸した時から沖縄戦は始まる。五月二十七日、日本軍指令部は首里から摩文仁方面への撤退を始め、五月三十一日には首里城陥落。

組織的抵抗はもはや絶望的となり、六月二十三日未明、牛島司令官と長参謀長は摩文仁岳中腹の指令部壕内で自決し果てた。

これによって、沖縄守備軍の第三十二軍は完全に軍隊としての組織的機能を失い事実上の戦闘は終った。

県下屈指の移民村中城

海外雄飛

明治三十三年一月十六日、第一回ハワイ移民二十六人がホノルルに上陸した日が、沖縄移民の始まりである。

その後、アメリカ合衆国本土、メキシコ、フィリピン、ペルー、カナダ、アルゼンチン、ブラジル、シンガポール、ボリビア、南洋諸島の順に渡航し、昭和十年までには海外在住者数四万二千六六九人に達した。（南洋諸島・台湾・満州国等当時の日本領土を除く）。

その数を市町村別に見ると中城村の四、〇九五人（男二、五〇〇・女二、五九五）が最も多くあとは羽地村、西原村、具志川村（中頭）、本部村、金武村、大里村、美里村、勝連村、小禄村と上位十村が続いている。

中城村の四、〇九五人は全体の九・六パーセントに当たり、外国在住者十人のうち一人は中城村出身という大きな数字である。当時の移民送出母体は宮古の一部の村を除く全県の市町村であった。

われわれは、この沖縄一の数字によって中城村がなるほど移民村としてのほまれが高かったことを改めて認識することができる。

右の海外在住者数は、沖縄県「外国在住者数」（一九三五年十二月末日現在）によるものであるが、当時の中城村の国勢調査人口は一七、八二〇人であったから、外国在住者率は二二・九八パーセントとなる。つまり、中城村民二〇〇人のうち約二十三人は外国に在住していたということになる。しかし、この外国在住者率においては羽地村の二八・九〇パーセントが最も高く、中城村は西原村、金武村に次ぐ第四位であった。

ハワイと南米を中心に

中城村の外国在住者四、〇九五人のうち最も多いのはハワイの一、五七四人で、次はペルーの八四四人、その次はブラジルの七一八人と続き合計三、一三六人となり全体の約七七パーセントを占めている。

あとは次の通りである。

フィリピン	四七九人
アルゼンチン	三八六人
アメリカ合衆国本土	七二人
カナダ	一九人
その他	四人

こうして、中城村の移民はハワイ、ペルー、ブラジルを中心にフィリピン、アルゼンチンなど各地に雄飛した。

その中でもハワイとアルゼンチンおよびペルーは最も中城村出身者が多く、全在住者に占める割合はハワイ二一・三パーセント、アルゼンチンは二パーセント、ペルー二パーセントを占めている。

送金状況

明治三十八年末現在の送金

明治三十八年末の中頭郡における海外移民送金総額は二万二千二四九円であった（琉球新報　明治三十九年二月五日）。

そのうち、六四パーセント余りの一万四千三四八円は中城村の移民が占めている。これは驚くべき高率であって、これによっても移民村中城が立証される。

中城村の一万四千三四八円のうちハワイからの送金は一万三千九二八円で、中城村総金額の九七パーセントを占めている。そして送金者のすべてが農業である。あとはアメリカ合衆国本土からの二七〇円（鉱業）とメキシコからの一四〇円（雑業）であった。

これを人員で割り出してみると次表の通りとなる。

移民地	人員	送金額（円）	一人平均送金額（円）
ハワイ	一八四	一三、九三八	七六
アメリカ合衆国本土	二	二七〇	一三五
メキシコ	一二	一四〇	一二
合計	一九八	一四、三四八	七二

これによると、ハワイとメキシコの移民はこつこつとためて送金し、アメリカ合衆国の移民は一挙に大金を稼いで送金したことがわかる。

明治四十年十二月末現在の送金

明治四十年十二月末日までの調査による、中城村の海外移民数と送金額は次の通りである。

移民地	職業	人員	送金額（円）	一人平均送金額（円）
ハワイ	農業	七六六	七〇、五三五	九二
アメリカ合衆国本土	雑	二三	七、七五六	三七七
メキシコ	鉱業	三	——	——
カナダ	鉱業	一三	四六	三五
合計		八〇五	七八、七五二	九八

これを二年前の明治三十八年に比べて見ると、送金者人員は約四倍、送金額は約五倍に急増していることがわかる。

その後の送金状況

明治四十年以後の市町別送金状況に関する資料がないため、ここに示すことはできないが、中城村では従来の通り県内でも常に優位を維持しながら推移したものと考えられる。

沖縄県全体の「年次別海外移民送金額」を『沖縄県統計書』の各年度からひろい出してみると、おおむね次のような傾向を示している。

- 明治四十五年から大正四年にかけては七五万円から八八万円程度。
- 大正五年は一気に一〇〇万円台を突破。
- 大正六年は八十万円を割って大正七年には九〇万円台に上昇。
- 大正八年には一〇〇万円台にもどって大正九年まで維持。
- 大正十年には九十万円台に下がって翌十一年はいきなり一四〇万円台を突破。
- 大正十二年には八十万円台に下降。
- 大正十三年には一〇〇万円台にもどって次第に増加し、昭和四年には二〇〇万円にとどこうとしたが昭和五年には一五〇万円に低下、更に昭和六年には九〇万円台に暴落。
- 昭和七年後には勢いを取り戻して六〇万円となり、昭和八年にはついに一〇〇万円を突破して毎年上昇傾向を示し昭和十二年には三五六万円となって史上最高額を記録した。
- 昭和十三年には一八〇万円台に急落して翌年はまったく同額、昭和十五年に一五〇万円台に下がって大正十三年の頃に逆戻りしている。

こうして、本県における海外移民送金状況は、不規則な線をたどりながらも上昇傾向を示し、昭和十二年には頂点に達したが、その翌年からは急落し、そのまま推移していった。

この傾向は中城村の送金状況にもそのままあてはまるものと推察される。

海外移民送金の推移は、そっくり国際社会全般の歴史を写す鏡のような気がする。



写真に見る沖縄戦

沖縄戦等における中城村民戦没者統計

1　この統計は、沖縄戦被災者調査票」、中城村役場保管の「軍人・軍属戦没者名簿」、「戦闘参加者部落別名簿」および沖縄戦被災者補償期成連盟発行の「六歳未満死亡者調査資料」その他の資料や村民の証言等に基づいてまとめたものである。

2　沖縄戦当時における中城村の人口動態が、確実には把握できなかったため、人口に対する戦没者の比率は出さなかった。

3　沖縄戦当時の世帯数についても、調査不十分なため、この統計には含めなかった。

4　沖縄戦当時の世帯数や人口動態については、更に調査を継続し、その実態を明確にしておく必要があろう。

5　沖縄戦において中城村民は、北部疎開より激戦地の南部への避難が多く、そのため、戦火に巻き込まれて多数の犠牲者が出た。しかし、北部に疎開した村民の中には、マラリア、栄養失調などによる死亡者も多出している。

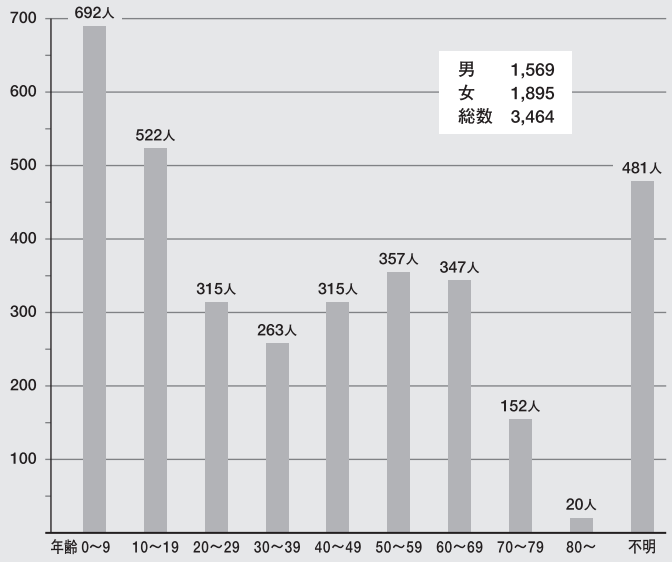
6　沖縄戦以外の戦地、中国、フィリピン、ニューギニア、ブーゲンビル島など、各地で中城村出身軍人が多数戦死している。

沖縄戦における戦没者

戦没者総数

男	女	計
一、五六九	一、八九五	三、四六四

中城村年齢別沖縄戦戦没者数



沖縄戦戦没者総数



沖縄県援後課資料より

中城村非核宣言文

世界の恒久平和を実現することは、人類共通の願いである。しかるに今日、世界的な規模で核軍拡競争が激化し、人類はかつてない核戦争の脅威にさらされている。こうした事態のもとで、核戦争から人類の滅亡を拒む世界の人々は核廃絶と平和を求めて立ち上っている。

中城村民は、世界唯一の核被爆国民として、また、第二次世界大戦において日本国内で唯一の悲惨な地上戦を体験した沖縄県民として、全ての戦争を否定し、人類の生存を脅かす核の廃絶を世界の全核保有国に強く求めるものである。

これは、平和を希求するわれらの総意であり、人類の生存を確実にするために、われらに課された歴史的使命である。

よって、中城村民は、平和に生きる権利を真に自らのものにするために、核の廃絶と恒久平和の確立をめざして全力を尽くすことをここに宣言する。

昭和６０年７月２９日

中　　城　　村

屋取集落

屋取集落の概要

屋取（方言・ヤードゥイ）というのは、およそ一八世紀初頭、政治、経済、文化の中心地であった首里・那覇から沖縄本島の農村地域に良人（ユカッチュ）と呼ばれる士族の人口移動が行われた。これらの士族帰農の移住者は居住人とよばれ、旧来の地人即ち田舎百姓とは区別された。

居住人は地人に配当された地割地（百姓地）に荒蕪地が生ずるとき、また請地、払請地が生じたとき、その耕地を叶掛け（小作のこと）して開墾耕作に従事するために寄留移住するもので、地人の住む古来の百姓村から遠く離れて耕地の中に点々と畑屋（はるや）式の宅地を構えるわけである。このような士族帰農即ち居住人によって沖縄本島の各地に形成された小村落を「屋取」と称している。屋取の語義は「宿る」ということで、貧乏士族が田舎下りをして、暫く農家に身を寄せそこに宿ったことから来たものである。

士族と地人との対立意識は戦前まで続いた

これらの士族たちは一時的仮居、仮住いの侘しい生活を余儀なくされていたが、いずれは再起して、もとの中心地域で一旗あげたいという信念は固かった。けれども時勢の流れは、却って帰農士族が増え、遂に定着同化して集落化が進み、いわゆる屋取集落と称する集落形成をみている。

この集落は江戸時代の新田集落と類似の開拓村落の性格を持っている。屋取の発生時期は、第一期―尚敬王代（一七三～一七五一年）を中心とする前後一〇〇年、第二期―尚温王代（一九七五～一八〇二年）以後廃藩置県（一八七九年）迄、第三期―廃藩置県後土地整理（一九〇三年）迄、第四期―土地整理以後、に分けられる。屋取集落は人口の移動（首里・那覇の士族）、集落の発生（在来の百姓村の籍内に仮居）、集落の農村化（定着居住）、集落の発達（行政的単位村）という形成過程を経て独立した村になるが、沖縄本島の約六〇〇の村落のうち三三九が屋取起源の村落である。北谷間切（現北谷町・嘉手納町）、具志川間切（現うるま市）、越来間切（現沖縄市）等は標準的な屋取集落の分布地域である。

屋取には三つの類型が見られる。①独立屋取型―在来伝統の本村から独立して屋取だけで行政的単位村を構成するもの②共存屋取型―在来伝統の本村と屋取が共存して行政的単位村を構成するもの③従属屋理型―いまだ本村に従属する段階のもの、等である。在来伝統の本村（古村）と屋取起源の村（新村）とは構造的な相違がある。

古村は「御嶽」「ノロ」「根神」「祭事」等の村落共同体の紐帯があって、平民百姓村の伝統性を強く保持しているが、屋取起源の新村にはそのような紐帯は皆無である。かつての身分制度の行きがかりから、特権意識を持つ居住人は、自尊心を持ち、独立不羈の節義を守り、士族意識を強く残していたので、本村（古村）の地人との交渉関係はむしろ対立意識さえあった。戦前まで相互間の通婚関係もほとんどなかった。

土地整理事業によって屋取新落の基礎が築かれていった

初期の屋取は土地保有についてそれ程執着はなかった。屋理飛鳥、屋取浮草などと言われ、耕作条件の良い所を探し求めて転々と移動したのである。けれども定着、同化、農村化するにつれて土地保有の指向は強くなり、一九〇三（明治三十六）年の土地整理後は、土地私有制への移行につれて二層土地確保の執念を固持するようになった。

屋敷を耕地の中に構えることが立前であったから、屋敷の周囲の百姓地は次第に屋取居住人に買取られ、屋取地は団地化していった。そのため耕地と屋取の距離はなくなり、農耕条件は有利になって農村機能を高めることになり、屋取新落の発達の基礎が築かれるようになった。

近代中城農業の生産構造

糖　業

改良式製糖場

明治末から大正の初めにかけて政府の補助を得て動力機を据え付ける団体所有の含蜜製糖場が幾つか現われ、これらを共同製糖場と称した。その後、大正初期頃から共同製糖場は改良製糖場と呼ばれるようになった。とくに一九一五(大正四)年七月に発布された製糖場規則で製糖組織の三区分がなされ、①「在来の装置に依り黒糖白糖赤糖を製造するもの」を在来製糖場②「在来の装置の一部に換ふるに新式機械を以てし、黒糖白糖赤糖を製造するもの」を改良製糖場③「新式機械を装置し主として分蜜糖を製造するもの」を機械製糖場と称するとの規定がなされた。この他改良共同製糖場とか改良動力共同製糖場と呼ばれることもあった。その間、技術上の改良が施され、初めは蒸気機関が主で、しかも大型のものであったが、次第に小規模に改め、また、石油発動機が主に用いられた。昭和期には七~八馬力の石油発動機で一日十五挺ほどを製造するものが普及した。明治末来の共同製糖場は大戦ブームの終結を待つまでもなく殆ど失敗し壊滅に瀕した。

戦後恐慌以降の日本経済の慢性的危機のなかで沖縄経済が破綻を来し、これを背景にして種々の救済運動が盛んになったが、糖業界でも大戦景気中一時立ち消えていた砂糖消費税の減免ないし全免運動等が再び高まった。これに対し政府は消費税の存続と引き換えに糖業補助を施した。とくに、一九二八(昭和三)年、沖縄県糖業奨励費として四万七五〇〇円が交付され、同年「共同製糖場設置補助規定」が設けられ、蔗作者十五人以上の製糖組合に対して補助金を与えることになり、共同製糖場は再び増加するようになった。

しかしながら「産業振興」政策が天皇制政府の対外侵略政策に沿うものであったように共同製糖場補助政策による機械化は黒糖業の農家からの分離、自立や産業資本としての発展を意図したものではなく、動力機導入によって節約される労力を甘藷、水稲、大豆、畜産その他に振り向けさせて、戦争遂行のための自給生産、食糧増産に資せんとするものであった。

糖価は公定価格制によって生産費をはるかに割る低さに釘付けられ、欠損欠損の出血製造となった。共同製糖場はその所有と経営の面でも国家のきびしい規制をうけた。

甘　藷

甘藷の栽培

後世、「いも大主」とあがめられた野国総管が、一六〇五年に甘藷を初めて中国から持ってきて、これを儀間真常が県内各地に広めて以来、沖縄では甘藷の栽培が盛んとなった。

甘藷実習園

甘藷は六ヶ月以上汗水流して育てても、一坪ではようやく米一升しか買えない程度の甘藷作農業である。

したがって換金作物としては割の合わない作物であった。しかし、毎日の主食と家畜の飼料となる甘藷は、重要不可欠の基幹作物として大事にされてきたことはいうまでもない。

大平洋戦時中の昭和十八年、県内では甘藷増産の一方策として県下の国民学校まで利用することを決定し、甘藷実習園指定校を指定した。

全県で七十校を選び、中頭郡では中城、喜舎場、西原等十九の国民学校が指定された。指定校には一反歩ずつの甘藷実習園を経営させることになった。

畦立植

甘藷の苗の植付け方といえば、沖縄では平植一方に決まっていた。それに待ったがかかって、畦立植が提唱され始めたのは昭和八年頃である。

甘藷栽培の改善策として、昭和八年頃初めて畦立植の普及をはかったの

は宮城鉄夫で、末広幸次郎も機会あるごとにそれを奨励した。

従来、農村では平植のいもが長期の保存に耐えないため、一日一日の食糧や家畜の飼料にあてるぶんを掘っていた。これに対し、畦立植にすると、いもが長期の保存に耐え、しかも一時に一つの畑全部の収穫が可能になるため、全体的に労力の節約にもなる。また、なによりも平植に比べて収穫が多いので農家経済の面でもプラスになるというのが、畦立植を勧める人たちの信念であった。

ところが、せっかくの奨励にもかかわらず、多くの地方では依然として平植を続けていたので、県では農業生産統制によって、甘藷の耕種基準を畦立植にすることを定め、不徹底な農村に対しては県農業会で徹底的に指導することになった。

昭和十八年夏には中城村の各字にも技術員が来て、青年たちに実地指導等をほどこしていた。

その後、実際に指導したとおり畦立植がなされているかどうかの実情調査を行ない、統制違反の平植に対しては厳重処罰することになり、目の前で引き抜かれた農家もあったという。

官民をあげての産業振興事業

かつて原勝負、重要物産品評会、畜産品評会、堆肥品評会等は、すべて農業の振興をめざして推進された農村独特の事業であって、これが中城村の農業充実発展に果たした役割は大きい。

そのほかにも、砂糖審査会、甘蔗立毛審査会、稲立毛検査等があり、養蚕が導入されるようになってからは、桑園品評会も行なわれ中城村もこれに参加した。

これらの事業は、あるものは行政側が主催し、あるときは産業組合などを組織して自主的に実施するなど、官民をあげての熱心な取り組みがなされていった。

近代中城農業の生産構造のまとめ

本村は、古くから純農村地域として発達し、恵まれた地形と肥沃な土壌を基盤に、勤勉で篤実な村民はじっくりと時間をかけて、いつのまにか「カラカラーヤカタンチン、ナカグスクヌンカタンチュミ」「訳＝空家は（通常）傾くが、中城では傾かない」と評されるほどの確固たる豊かな農村を築き上げてきた。

養畜面では馬と豚を主軸に牛、山羊、鶏等も飼育し、特殊な例としては養蚕も営まれ有畜農業の実をあげてきた。


ニンジン畑


サトウキビの収穫


マンゴーハウス


電照菊

学校教育

児童出席率状況に見る中城教育の歩み

明治十五年に中城小学校が創立されてから同三十五年頃までのおよそ二十年間における本村小学校教育の課題は、本県の全体がそうであったように、学齢児をいかに学校に入学させるか、すなわち就学率の向上を図ることであった。

行政当局や学校側ならびに有識者の努力によって、親がめざめ子女が自覚してようやく就学率が七〇パーセント台に達したのは明治三十四、五年の頃で、これが年毎に向上して、ついに九八パーセント以上の児童が修学するようになった。

こうして、就学率が高まるにつれて、就学児童の欠席が増加した。

そこで、今度は出席歩合の向上が教育上の重大問題となり明治三十七年頃からは新聞紙上にも児童出席調査の状況をしばしば取り上げられるようになった。

当時の新聞発表によると、明治三十七年六月十六日から同六月三十日までの中城三校の出席率（男女合計の出席百分比）は、中城で最も好成績の津覇小学校が九二・二六パーセントで中頭郡郡内二十三校中の第十二位、中城小学校は八九・八〇で第十六位、喜舎場小学校はさらに悪く八四・六七パーセントで後ろから数えて第三位である。

同年十月一日から同十五日までの出席調査でもほぼ同様な傾向を示している。

明治四十二年一月になると中城間切三校の出席率は向上し、三校平均九四・七八パーセントとなったが、中頭郡内では依然として下位にあった。

ところが、その年の五月の調査ではいきなり九八・六〇パーセントに跳ね上がり、中頭第一位の成績をおさめている。

けれども、その年の十月の調査では九六・四六パーセントに低下し、読谷山の九七・三二パーセントに追い越されて第二位に下がっている。

明治四十一年三月の調査では、中城三校の平均は九七・四九パーセントの成績を示し、再び中頭で最高の座を占めた。

その後、中城三校の出席率は年々向上し、大正を経て昭和に至るまでには一〇〇パーセント近くにも達し、常に中頭はもとより県内でも上位を保ちながら推移してきた。

県内有数の出席率の好成績は、教育村中城を立証する一面であるが、明治四十二年五月以前までの中城の出席率はむしろ中頭郡内でも下位の成績の中をさまよっていた。これが、明治四十一年五月には思いもよらずトップに躍り出たので、当時の統計に狂いはなかったかと疑いたくもなる程の向上ぶりである。

その背景には、その衝にあたる先人たちのなみなみならぬ苦労が隠されていたことと、それに応える間切住民の近代教育へのめざめがあったと思われる。

また、中城の出席率を高めた背景には、三小学校生徒の出席督励のため、明治三十七年の卒業式から皆出席児童全員に対して表彰状と賞品が贈られたことも忘れてはならない。

このことについて、元中城小学校長の宮城條榮氏は、『中城小学校創立百周年記念』（昭和五十八年三月一日発行）の中に、次のように述べている。

「明治三十年代頃までは、農民には学問の必要はないとして、初めのほどは、物品、金銭を与えて就学せしむる状態であった。

出席督励も容易でなく、明治三十六年頃は三小学校とも出席が悪く、学校当局の大きな悩みであった。

その善後策を検討している時、仲村渠栄保氏（字大城・安里栄俊氏の父）が、三校長の真剣な討議に感激されて、三小学校生徒の出席督励のため、表彰状と賞品を贈ることを提案された。

仲村渠栄保氏の厚意に感謝し、明治三十七年の卒業式から実施された。

氏のご厚意によって生徒の父兄も教育に対し理解を深め、三小学校の出席率、学力も向上し輝かしい成果をあげることができた。

さらに、その頃から資金を贈り、三小学校区に学事奨励会を組織して

出席率の推移

年度	学校名	児童数	出席率	中頭での等位
明治三十七年六月十六日～三十日	中城小	四八三	八九・八〇	（二十三校）一六
	津覇小	七四〇	九一・二六	一二
	喜舎場小	四九八	八四・六七	二一
	中頭合計	一二、九五一	九〇・二六	
明治三十七年十月一日～十五日	中城小	四八二	九一・五三	（二十二校）二〇
	津覇小	七一八	九二・八一	一六
	喜舎場小	四八六	九一・二五	二一
	中頭合計	一二、七七六	九三・八六	
明治三十九年十二月	中城三校		九四・七八	中頭十一村中の等位 六
明治四十年十月	中城小	四一三	九八・五二	（二十六校） 三
	津覇小	二一二	九五・〇八	一五
	喜舎場小	四二七	九六・七五	八
明治四十一年三月	中城村		九七・四九	中頭十一村 一
明治四十二年十月	中城村		九四・八九	中頭十一村 三
大正四年二月	中城村		九一・六五	中頭十一村 七
大正六年二月	中城村		九五・八六	中頭十一村 二
大正六年三月	中城村		九五・二八	二
大正六年六月	中城村尋常科		九四・九七	中頭十一村 三
	中城村高等科		九六・五〇	中頭十一村 二

学事の奨励に努力を傾注したのである。一九〇四年から四十二年間も継続されたのである。

その功績の偉大さに感動された当時の大田間切長も、文教振興政策に拍車をかけられたため、学校教育に対する父兄一般、村民の理解も一層深めることができ、三小学校は向上心も旺盛となった。そして師範学校、中学校、農学校への進学者も毎年増加して、中城村は県下一の教育村と呼ばれるようになった。

仲村渠氏には県知事と大田村長から感謝状が贈られ、大田村長には文部大臣から教育功労者として、金盃と勲七等青色相葉章が贈られた。」

こうして、中城三小学校の出席率は当初は不振の状況から次第に向上し、やがては県内の他校をリードするほどのめざましい好成績をおさめて近代の末期に至ったのであるが、その過程は歴史的にどのような意味があり、それを現代的にどのように評価し、どう意義づけるか、現代の中城村民にじっくりと考えていただくことを願ってやまない。

教員を多数輩出

明治三十七年三月上旬のころ中城間切では六十名の教員を出していた。それに三月下旬卒業見込の准教員講習科生十一名。師範学校在学中の者十一名、入学試験合格者八名がおり、これらを合わせると今後四カ年間には約九十名の教員を輩出することになる。

これは、当時としてはとてつもない大きな数字で、中城は「県下否全国に比類稀なる教員の名産地と云ふべし」と、琉球新報にも紹介された（琉球新報　明治三十七年三月十六日）。

村制施行百周年記念事業写真展









笑顔が戻った日 in 中城



二〇〇八年四月十六日

中城村制施行百周年記念事業「笑顔が戻った日ｉｎ中城」記者発表

新垣清徳前実行委員長は「村制百周年を記念する一大事業として、写真展を開催し、戦後をたくましく生きる人達をみてもらいたい。戦前・戦後の百年を知ることにより、当時の厳しい状況を見て、村づくりや新しい時代の展望と創造につながればと思う」と写真展の開催を発表した。



手前から喜舎場静夫琉米歴史研究会理事長、新垣清徳前実行委員会長、
新垣善功前実行委員副会長、比嘉盛行前実行委員副会長



開館に際しあいさつする
新垣清徳前実行委員会会長



開会のことばを述べる
伊佐盛信実行委員副会長



新垣善功前実行委員副会長



県知事代行の仲村守和教育長



新垣邦男北中城村長

2008年5月17日
中城村制施行百周年記念事業
写真展・オープニングセレモニー



「笑顔が戻った日in中城」写真展がテープカットで幕開け



オープニングを飾る中城護佐丸太鼓の演舞

写真展会場内

村制施行後の百周年を振り返る歴代村制のあゆみコーナーや戦後復興時の沖縄を映したDVDの上映、戦前・戦後の写真約1300枚を会場いっぱいに展示。







▲歴代村制のあゆみコーナー



▲出土遺物展示コーナー
世界遺産登録された中城城跡や県内の城跡から出土した貴重な遺物も展示された。



▲DVD視聴コーナー







期間中は村内の小中学生が平和学習の一環で訪れた。
戦時中の写真を前に熱心にメモをとる子供たち。
戦争を知らない子ども達にとって過去に起こった悲惨な戦争を写真展で知ることができ貴重な時間となった。

笑顔が戻った日 in 中城





会場前には、沖縄戦で米国に持ちさられ、後に返還された大聖禅寺の鐘が展示された。



▲写真展開催期間中の土日は農産物・特産品の販売も行われた。



▲戦前・戦後の写真





事前のテレビ・ラジオ・新聞やチラシなどの呼びかけもあり、村内だけではなく、県内・県外から多く来場者がつめかけた。

中城村制施行100周年記念事業「笑顔が戻った日 in 中城」来場者数及びアンケート結果

5月17日から5月25日までの9日間にわたって開催された写真展「笑顔が戻った日 in 中城」においておこなった来場者数及びアンケート結果について報告いたします。

1. 写真展来場者数

日　付	来場者数（一般）	来場者数（小中学校）	
2008／5／17（土）	411人		
2008／5／18（日）	731人		
2008／5／19（月）	319人		
2008／5／20（火）	404人	173人	中　中1年
2008／5／21（水）	381人	159人	中　中3年
2008／5／22（木）	431人	244人	中　中2年
2008／5／23（金）	413人	83人	津覇小6年（27+27+29）
2008／5／24（土）	589人		
2008／5／25（日）	956人		
小　計	4,635人	659人	
合　計	5,294人		

2. 来場者の声　（写真展アンケートより）

■６０年前の鮮明な写真をみて感動しています。復興にむけて限りない力強さを感じました。子供達の顔が活き活きとしていて素晴らしい。

（南部　女性　５０代）

■中城の昔の歴史が、いっぱい見られました。自分の住んでいる中城が１００年になっているとはおもいもしませんでした。これからもずっと、人々の心があたたかい中城でありますように！！

（村内　女性　１０代）

■　８０代の両親を連れて来ました。記憶を確認しながら見知らぬ方とも話しをしていました。いい親孝行になったとおもいます。ありがとうございました。

（村内　女性　５０代）

■　写真で伝わることがたくさんありました。人々の生活や現在とはだいぶ変わった土地・自然などとても勉強になりました。ここ何十年かぐらいでこんなにも暮らしが豊かになったのだと驚いたと同時に少し悲しくもある気持ちです。

（中部　女性　２０代）

■　・時々展示して欲しい。一年をかけてでも良い
・本当になつかしい写真がたくさんあった。

（村内　男性　６０代）

■ 母の幼き頃の姿が写っていた、感慨深いものがある

（北部　男性　５０代）

■　大変良かったと思います。海外からの引き揚げですので、その場面を、昔をたどりながらなつかしく思いました。小さかったのでよく覚えていなくて、でも本当に来て良かったです。

（村内　女性　６０代）

■　貴重な写真がたくさんあって、沖縄では何があったのかを知ることができました。戦時中、九州へ疎開していたために知らなかったことを知ることが出来ました。
中城村のことは、これからも村史を通して知りたいと思います。

（村内　男性　８０代）

1908−2008
中城村制100周年
百年の軌跡
Nakagusuku village ◆ 100th Anniversary



座談会

古き良き中城村を語る



出席者（左から）
仲眞　良明（元中城村青年会会長）
伊佐　　実（元中城村役場職員）
知念　　清（元中城村立津覇小学校校長）
安里　英一（佐敷中城漁業協同組合中城支所長）
新垣　善基（農業）
仲松　和枝（第十四代中城村婦人連合会会長）

中城村制施行一〇〇周年記念座談会

古きよき中城村を語る

生まれも育ちも嫁ぎ先も中城　仲松

司会　平成二十年は村制施行一〇〇周年に当たり、記念誌を発行することになりました。そこで本日は皆さまにお集まりいただきまして、中城村の古きよき時代を語っていただこうと思います。よろしくお願いいたします。

まず自己紹介と中城村との関わりについてお話しいただきたいと思います。知念先生からお願いいたします。

知念　戦後まもない昭和二十一年の三月に津覇初等学校（現津覇小学校）の教壇に立ちました。二十歳でした。昭和二十三年に六・三・三制の学制改革により、それに伴って中城中等学校に赴任いたしまして、以後、県の中部連合を教育委員会・文教局・県教育委員会など教育行政十二カ年を含め、最後は津覇小学校校長を務め、三十九年学校教育に携わりました。その後、本村の教育委員長として十二カ年勤務いたしまして、現在に至っています。

新垣　和宇慶出身の新垣善基です。私は軍作業、東陽バスの運転手を経て、家業を継いで農業に従事しました。もともとキビ作農家だったんですが、サトウキビでは生活ができないということで、野菜づくりに切り替えました。村でビニールハウスを入れたのはうちが最初です。県の農業普及員がどうしても中城村に施設栽培を導入したいということで、七十坪という小さなビニールハウスでしたが、第一回の村の単独事業で三〇％の補助金を出してもらいました。その後、土地改良後は国・県の七〇％の補助事業で村内でも第一団地、第二団地、北浜、南浜など施設栽培が盛んになっています。

現在、トマト栽培に従事し、もう後期高齢者にはまっていますから（笑い）、そろそろ後継者育成に取り組もうかと思っています。

安里　南浜出身の安里英一です。復帰二年前でしたが、三十代で部落の自治会長に就任しまして、二十九年九カ月務めました。それと平行して中城漁協長も二十年務めました。戦後、漁業権の申請を先輩のみなさんがやっていなくて、中城漁協は任意組合になっていました。漁業権を取り返すのに役場のみなさん、自治会長、村議員のみなさんといっしょに非常に苦労したという思い出があります。今日は漁業に関する思い出を語ろうかと思っています。現在は、吉の浦発電所と漁業者との間の漁業補償の問題で、その交渉委員として中城支所の支所長をやっています。

伊佐　伊佐実です。私は高校を卒業しまして、昭和三十八年に役場に入りまして四十一年五カ月務めました。最初に配属されたところは税務課でした。当時は給料日になっても給料を払う金がないということで、役場の職員が総動員で税金を徴収して給料を支払った、ということもありました。経済課に移りまして、農業に関する計画、農業振興整備計画、農林漁業構造改善計画など、詳しいことは後ほど改めてお話しますが、定年まで十二の基本的な村の計画に携わりました。

一番記憶にあるのが遊休土地利用促進計画です。これは国土利用計画の中で、遊休地を活用すれば国が購入した土地の利息を補給する、という計画です。この吉の浦公園が日本全国で最初に計画策定され、用地買収をしました。前例がないわけですから、県の職員と国土省に何度も通い、計画が終ったときには国土省の担当補佐の桜井さんがわざわざ中城村にあいさつに来られた。そういう思い出があります。

この機会に、村民にもこういうことがあったのか、というようなお話をしたいと思います。

仲眞　南上原出身の仲眞良明です。昭和三十九年に高校を卒業後会社勤めをし、去年（平成二十年）六月まで四十四年近く務めました。その間、社会活動、青年会活動、体育指導員、体協、ＰＴＡと、会社の理解と地域の協力をいただきながら従事してきました。高校卒業と同時に青年会に入会し、それから八年ほど村の青年会活動をしました。ＰＴＡでは子どもの成長とともに小学校、中学校、高校で役員を務め、昭和六十年から六十一年まで中城中学校のＰＴＡ会長を務めさせていただきました。ＰＴＡでは、周りの方たちのご指導を受けて私自身もずいぶん成長できたと考えています。スポーツが好きですので、体協は一昨年まで四十年ほど活動をしてきました。昭和五十年に村の体育指導員となり、三十年間続けました。これまで、いろんな方たちとの交流で自分を高めてもらったと心から感謝しています。

後ほど、これから自分が取り組んでいきたい、生涯学習・生涯スポーツについてお話ししたいと思います。

仲松　北浜出身の仲松和枝です。生まれも育ちも嫁ぎ先も中城で、中城から一度も外へ出ておりません。生まれは屋宜で、昭和四十三年に高校を卒業し、卒業と同時に青年会活動に二年間参加しました。結婚をし、青年会を辞め、子供が生まれて、就学年齢に達した昭和五十六年ごろから津覇小学校のＰＴＡ役員として学校と関わってきました。

婦人会には二十五歳で入会し、平成四年から村婦連の会計、副会長、会長を務めました。会長のときに中城村婦人連合会が五十周年を迎え、記念式典を開催しました。その後も監査や顧問を務め、まだ現役で頑張っています。平成十二年から十五年までの四年間は中部地区婦人連合会の役員も務めさせていただきました。現在は、中城村赤十字奉仕団の委員長を務め、これまで色々な団体と関わってきました。

村役場はコンセットで、村民が担いで運んだ

知念

司会　ありがとうございます。さて、これから戦後の中城村を振り返ってみたいと思います。知念先生、昭和二十三年に初等学校に赴任されたとのことですが、戦時中はどちらにいらしたんですか。

知念　学徒動員令により、動員され首里城にいました。菊水隊といって、球一六一六部隊の軍司令部所属の斬り込み隊に配属されていました。昭和二十年五月下旬、首里から島尻の高嶺大里・摩文仁に移動し、戦後は摩文仁から北部の金武に移り、向こうで教員をいたしまして昭和二十一年に中城村に帰還しました。ちょうど中城の学校教育が始まるところでした。

司会　戦前と戦後では村の様子もずいぶん変わっていたでしょうね。

知念　変わっていましたね。

司会　本日の出席者の中に教え子もいるんですか。

安里　私の恩師です。

知念　終戦後、昭和二十一年一月の下旬に北部各地に避難していた村民が次々と当間に移動してきました。二月の下旬になると津覇区の建設計画が実施され、東恩納徳友先生は建設隊長として、戦禍で荒廃した村の復旧に全力を傾けるとともに、学校の早期開校にも精力的に取り組まれました。東恩納先生は、北部からの村民の移動の際に、当時石川市にあった沖縄諮詢会と再三交渉され、移動が実現したのは先生の力が大きかった。

学校設営では、一月二十六日に中城初等学校（現中城小学校）を当間の現在地に開校し、三月十日には津覇初等学校（現津覇小学校）を戦前の津覇国民学校敷地に開校した。私は学校の設営にも参加しました。開校当時の生徒数は三〇〇名、職員は東恩納先生を中心に十名でした。校舎は木造茅葺き校舎が二棟と、昭和三年に建てられた鉄筋コンクリートの校舎がそのまま残っていた。戦禍で大きな穴が空いていましたが、授業には大きな支障はなかった。開校早々に東恩納先生が掲げられた教育方針は「個人の完成」で、その目標達成に向けて知育・徳育・体育の教育目


当時の津覇小学校

標が明示されました。

当時の思い出としては、戦禍で荒れた子どもたちや住民の不安定な精神状況を安定させるために運動会がまず行われ、プログラムには昔懐かしい俵担ぎなどがありました。また、郷土色豊かな学芸会が毎年のように開催されました。

テント教室の屋根から農具が頭に落ちてきた　安里

司会　そのころ、生徒であった安里さん、なにか思い出がありますか。

安里　先生がおっしゃったようにコンクリートの校舎と瓦葺きの木造の校舎が残っていましたが、それだけでは収まらなくてテント教室での授業がありました。机やこしかけもあり合わせのものでした。一番の思い出は、農業実習の時間があって、各自うちから鍬などの農具を持ってきたのですが、置き場所がないのでテントの上に乗せてあった。すると、授業中に強い風が吹き、テントがはためいたかと思うと上に置いてあった誰かの農具がぼくの頭の上に落ちてきて、頭に穴があいた。（笑い）

それから中学に行きますと、丸太を組んだ茅葺きの校舎でした。ちょっとした台風が来るたびに屋根が全部吹き飛んでしまうので、屋根を補修するまで一週間か十日くらいは授業ができなかった。

仲松　中城村婦人会は昭和二十三年十一月三十日に結成総会が行われていますが、その会場が津覇初等学校のコンクリートの講堂でした。来賓と会員合わせて約三〇〇名が集まったそうです。初代の会長は女教師の比嘉栄子先生で、この年の二月の選挙で村長に当選した渡嘉敷真睦さんが特にお願いされて就任なさったそうです。


当時の中城中学校


知念　清さん


安里 英一さん


仲松 和枝さん

司会　役場もいろいろ変遷があったようです。戦後すぐは当間にあり、それから奥間へ移転し、昭和二十五年に現在地に移った。

知念　コンセット（米軍の組み立て式かまぼこ型兵舎）一棟を役場にしたんですが、移動のとき、あのコンセットは村民が担いだ。（笑）現在の中城中学校の運動場のところに立てて、役場にしたんです。北側にはコンセットがもう一棟あって農協が、また南側には郵便局が奥間から移動し、どれも村民が担いで運んだ。

新垣　担ぎましたよ。

役所がビニール張りを手伝ってくれた　新垣

司会　戦後、沖縄は米軍施政下に置かれますが、昭和四十七年の復帰以前にとくに印象深いことは？

安里　私は復帰前から復帰後にかけて二十二、三年、漁協長を務めました。復帰前の中城の漁業者が法人としての申請を放棄してしまい、漁協は任意組合でした。任意組合では漁業権がなく、いろいろな面で支障を来すことになる。一例を挙げると、今では農道を整備するにしてもちゃんとした資材を使い、タール舗装でやるんですが、当時は何もありませんから、海から砂を上げてきて窪地などの補修をした。ところが、沖縄市と与那原町の両方で中城の海の漁業権を持っていたために、中城の役場では、中城の海岸であるにも関わらず、砂を上げたくても砂が上げられない、ということになった。砂を上げると両方の漁業権者から補償請求をされるんです。村としてもとても困りましてね。

また、以前は東洋石油精製の中城製油所、今は吉の浦火力発電所が中城村に立地していますが、法人組合をつくらないと漁業補償が受けられないんですね。それで、中城の漁業者も法人組合にしないと大変だということで村を挙げて漁業権の申請に取り組みました。

当時、役場の課長以上の方は総動員で、議員のみなさんにも動いてもらいました。漁業権を設定するための公聴会というのがありましてね。沖縄県中の漁業者が集まって、中城漁協を代表して「中城の漁民に漁業権をください」という意見を述べるんです。結局（漁業権を）取り返すのに二、三十年かかった。

司会　村を挙げて、漁業権獲得運動をされたんですね。

安里　復帰後、ようや

く漁業権を獲得したときには、村の老人福祉センターで大々的なお祝いをしました。

司会　先ほど、新垣さんがサトウキビをやめて野菜づくりに転向されたと話されていましたが、それも復帰前のことですか。

新垣　復帰以前はキュウリ栽培をしていました。ちょっとの台風でしたら、今だったら一本の電話で野菜を調達できますが、復帰以前ですからＬＣ（商業信用状または荷為替信用状）を組まないといけない。日にちがかかり、その間、内地から入ってこないものだから高値で売れた。七十坪で一〇〇〇ドルというお金が上がった。当時、二〇〇〇ドルでは立派な家が建ちました。

　今は農協さんで野菜部会とか部会が作られ、せりでさばいてくれるからだいぶ助かっていますが、当時はぜんぶ相対売りです。午前〇時から那覇の農連市場に行きました。一時、二時からは農連で販売した。作って、収穫して、売ることまでした。大変な生活でした。

司会　寝る間がないですね。

新垣　島ニンジンは一本一本洗っていたが、時間がかかるので、なにかいい方法がないものか、と思って、島ニンジン洗い機を自分で工夫して作った。そうしたらニンジン農家もだいぶ増えた。今では中城を代表する農産物です。


島ニンジンの収穫風景


新垣 善基さん


伊佐　実さん


仲眞 良明さん

安里　新聞（平成三年六月十九日付）にも紹介されたんですが、新垣さんは中城で初めてマンゴーを作って、中城でマンゴーはできませんよ、という定説を覆したんです。

新垣　中城はアルカリ性土壌ですから、当初、マンゴーの糖度が出ないから作らないほうがいい、と言われていた。自分が最初に作ったら、糖度もあるし、生産高も上がって、それから定着した、ということです。

伊佐　新垣さんは、復帰後、中城で初めて施設栽培を始めた方です。

新垣　三十五年前の中城には一坪も施設栽培がなかった。県の普及員が「南部にはあるから中城もやったほうがいいよ」ということで、うちへ来て「善基さん、あんたが最初に入れてください」とお願いをされました。内地からビニールハウスを輸入して、それで成功したので、後からどんどん続いた。露地栽培ではどうしても生活が安定しないということで施設栽培に移行し、今では相当盛んになっています。


マンゴーの栽培中の新垣さん

　その当時、（伊佐）実さんは経済課にいらっしゃった。ビニールハウスの導入の時、とても印象に残っているのは、役所がどうしても成功させたい、とビニール張りにも来たんですよ。経済課が手伝ってくれた。

司会　そうなんですか。

新垣　今もやってくれるといいんだけど。（笑い）

　キュウリが暴落したので、今はトマトを作っています。トマトは消費が増えていて、県内では一日二十トンでも足りないくらいです。トマトは収穫期間が九カ月くらいあって、一度作ったら周年栽培ができます。うちでは反当たり二十トンぐらい出ますから、これだけで飯が食える。サトウキビより多く出ます。

　施設栽培に切り替えたおかげで、子どもたち三名は全部内地の大学に出しました。仕送りが大変でしたけれど、キビ作農家ではどうしようもなかったです。

司会　復帰のころ、仲眞さんはどうしていらっしゃいましたか。

仲眞　昭和三十九年に青年会に入りまして、当時、（仲松）和枝さんもご結婚されるまではいっしょに活動していました。復帰前は今でいう体協の活動が青年会の一つの柱でした。バスケットボールとか、陸上競技大会、バレーボール大会など、いろんな形で活動していました。

　それとあと一つは復帰運動ですね。これは大きな柱でした。教職員組合とか地域の方々、そして婦連の方たちも頑張っていましたが、青年会も勉強会を重ね、（復帰

運動の）中核となっていました。祖国復帰、日本復帰をして、われわれの歩むべき道を進んでいかないといけない、ということで大変頑張りました。あのときの仲間は強い連帯感で結ばれていて、今でもずっと付き合いが続いています。これからも青年会には頑張ってほしいのですが、最近は活動が停滞しています。エイサーなど伝統芸能を中心に活動している程度です。

司会　仲眞さんが青年会活動をされているころが一番盛り上がっていた？

仲眞　復帰という大きな目標がありましたので。

知念　戦後の青年会活動は昭和二十三年に始まり、最初の会長は教育界から出ました。仲眞良盛さんで、今千葉の松戸にいます。

仲眞　親戚ですね。

知念　復帰運動では日の丸掲揚運動などにも取り組んでいましたね。

仲眞　そうですね。青年会も教職員組合も労働組合も、復帰運動に燃えていました。

当初三年のつもりが定年まで　伊佐

伊佐　昭和三十八年に役所に入ったときの私の給料は三十五ドルでした。で、軍作業は四十五ドル。給料が安いので役場に入ろうという人はいなかったんです。部落のだれかが「（部落のために、村のために）行きなさい、頑張りなさい」という形でした。私も親父に言われて入って、「では三年間ね、三年経ったら辞めてもいいね」と念押しをして入った。

　結局、復帰運動をしたり、いろいろしているうちに三年と言ったことを忘れて、ずっと定年までいた。復帰前は組合運動を通じて復帰運動を年がら年中、やっていました。復帰の前年には東京まで労働組合員が大挙して出かけて行き、一週間くらいテントを張って関係省庁、関係団体に要請行動をしてきたんです。

司会　最初三年のつもりが定年までいらした、ということはよっぽど居心地がよかったんでしょうか。

伊佐　仲眞さんたちといっしょに青年活動や復帰運動をしていく中で、抜けられなくなったんですね。

　それと、復帰後は計画行政に携わりました。実は中城村には計画行政というのが一つもなかった。初めて昭和五十二年に農業振興整備計画を立てた。それまで中城村にはデータらしいデータがなかった。



　仕事はやりっぱなしでデータが保管されていなかったんです。各課にデータを書き入れてくれるよう書類を流したんですが上がってこない。それで、一人で県の資料を調べに行ったりして、一年かかった。一年目はデータ整理をして、翌年はデータに基づく計画を立てた。夜明けまでかかって作りました。その時は経済課農政関係の一担当でした。

司会　ビニールハウスの手伝いをしながら、資料も集めたんですね。

伊佐　このときの農業振興整備計画は、中城村の農業の基本になっています。資料さえ集まれば、すべての計画が容易になる。その後の農林漁業構造改善事業で、新垣さんが鉄パイプでハウスを作り、計画に基づいて北浜、南浜に集落センターも作った。昭和五十三年に遊休地土地利用促進計画、昭和五十七年に十年計画の農村総合整備事業整備計画を立てて、完了しています。この計画の事業費は二十四億円を超えています。こうして定年までに十二の計画に携わりました。

司会　計画を遂行する上でのエピソードはありますか。

伊佐　農業振興整備計画を立てたときは、農地から外してくれ、入れたくないという人がいましてね。役場に「なんで私の土地を計画に入れるのか」と、カマを持ってやって来て脅迫されたこともありました。（笑い）



和宇慶土地改良地内（津覇）を望む

　沖縄ガルバ（溶融亜鉛メッキ加工業）を誘致したときには、公害があるという風評があったので、実際に大阪にあるガルバの工場を視察に行きました。そして、公害がない、ということが分かったので、今度は各字でも、村全体でも、村民を集めて説明会をしました。琉大の先生二人にガルバ計画について調査を依頼し、大丈夫だというお墨付きをもらい、自信を持って説明会に臨んだ。次に漁協に説明に行き、「公害がないので」と説明したら、「エー、ヤナワラバー、トゥジャタティンドー（銛で突くぞ）」と言われました。

安里　農林漁業構造改善事業では農業と漁業では事情が違っていた。農業の構造改善事業の場合は三分の二は国からの補助ですが、三分の一は受益者負担なんですね。負担が大きいものだから、なかなか進まなかったということがあります。漁業の場合は三分の二が国からの補助、残りの全体の三分の一が県からの補助、あとの六分の一を市町村と受益者負担ということで、受益者は十二分の一でこの事業ができる。少しのお金で大きい事業ができますから、浜漁港という大きい漁港を作り、その中に製氷施設、給油施設、船を上げる巻き上げ機、倉庫、競り市場、事務所を作った。

　一方、土地改良に関しては、当時、和宇

慶の自治会長で、また、現在、和宇慶の土地改良区の理事長をしています。当然、自治会長は土地改良に携わり、換地委員になりますので、先ほど伊佐さんが話されていたようなもめ事もありました。例えば、和宇慶地区の上の部落に二〇〇坪土地があり、下の土地に五〇〇坪ある場合、土地を一つにまとめるのが土地改良事業なんですが、地主としては下の土地の五〇〇坪を上に持っていってくれ、と言う。どうしてか、というと農業の被害では塩害が一番大きいんです。それで（塩害の被害の少ない）上へ持っていけ、ということで、換地委員の家に、あるいは理事長の家に酒を飲んで来ては、カマを持ってあばれるということがありました。換地委員は非常に苦労しましたので、今度（土地改良区の）解散総会をするに当たって、みなさんの苦労をねぎらって、亡くなった方も二人いらっしゃるんですが、遺族の方に来ていただいて、感謝状と記念品を差し上げることにしています。



新垣　私も換地委員でした。換地した結果は全部改善センターに貼り出すんです。これを見て、納得がいかないと喧嘩しに来る人もいた。換地の際は、大きなところにまとめるというのが基本です。

安里　そもそも土地改良のいきさつは、津覇から南側は戦前日本軍の飛行場地として接収されたんですが、完成しないうちに終戦になり、戦後は米軍が使っていました。それが開放になったけれど、とても農業ができるような状況ではない。そこで農業ができるようにと、村で最初に和宇慶地区で土地改良が行われたんです。



浜漁港

東恩納徳友先生は、戦後の中城の父

知念　土地の話と言えば、戦後開校した中城中等学校の敷地移転問題についてぜひ触れておきたい。昭和二十三年四月に当間の海岸に近い比嘉田原に開校したけれども、ここは湿地帯で校地には不適当だということで、敷地移転問題が起こりました。なかなか決着がつかなかったが、職員で陳情書を作るなど議会や村民に訴え、翌年の昭和二十四年、現在の中城中学校敷地に移ることができた。

昭和二十九年には、中城小学校の敷地移転問題に端を発し、中城中学校を分離し、中城小学校と津覇小学校に併置しては、という小中併置校問題が起きました。村民の意見も賛否両論あり、非常に困ったけれど、危機に立った場合の判断力と牽引力、ピンチに立った場合の存在感を備えた名リーダー、東恩納徳友中城中学校校長の尽力により解決した。前述したように、この人は戦後、中城の復興の先頭に立ち、また、戦前・戦後、中城の教育界で活躍されました。まさに戦後の中城の父だと思いますよ。



当時の校長
東恩納徳友先生

それから、東恩納先生は体育・徳育・知育の中でも、特に体育というものを重要視された。昭和三十年代の中城はスポーツの黄金時代で、全島のバレー、バスケット、陸上の種目を中城が席巻した。



仲松　私が中学一年の時、二期先輩がバレー、バスケットで沖縄一でした。

知念　アベック優勝が連続四回、優勝が五回ということでスポーツ全盛の時代でした。人心の荒廃を慰めるために、スポーツに力を入れたんですね。

スポーツで地域力を高めていきたい

仲眞　体協主催の各字対抗スポーツ大会には十八カ字のチームが欠かさず出てきました。真夏の暑い日に外での試合で、ベスト4、あるいは決勝まで勝ち進むとけいれんを起こして、ひっくり返る選手もいました。また、字ごとのライバル意識がすごく強く、勝負にこだわるあまり喧嘩になることもありました。陸上競技大会で、負けた選手がスパイクを持って追っかけたという話もあります。今では考えられない話ですが、それだけみんなが目標に向かって頑張った。頑張ろうという意識があったと思う。これからも地域力を高める一つの力にしたい、と思います。





1961年ごろ獲得した優勝旗



第一回全島龍球選手権大会優勝記念

伊佐　昭和六十二年の海邦国体のときは事務局長でした。実は、村民の対抗意識、村民のプライドの高さを利用して、民泊を成功させたんです。当時の三役は民泊は難しいと、公民館での受け入れを考えていた。ところが、いよいよ国体となると、民泊を受け入れなかった家庭では、子どもたちから「どうしてうちは民泊を受け入れなかったの」と攻められた。プライドが高い村民性があるんです。「石橋を叩いてなお、水深を計ってなお渡らず」という面もあるんですが、対抗意識が強い。

仲松　素朴で思いやる心（ユイマールの心）が中城の村民性としてあると思います。婦人会でも歴代の会長は、会長を退いたあとも村の行事や婦人会の諸事業に協力、参加して下さる。他の市町村では、会長を退くと何の連絡もなく、交流もないと聞いています。


体協のバスケットボール優勝記念（伊集区）



国体の時は、婦人会もかなり活躍しました。歓迎式で踊りを披露したり、また、沖縄の県花であるデイゴのコサージュを作り、参加者にプレゼントしました。我が家では、民泊を受け入れました。北浜では、群馬県の少年女子バスケットボールの子供たちを受け入れました。受け入れは、試合の前後一週間で、滞在中の食事の献立は決められていましたので事前に講習会をして、本番に備えました。沖縄の料理もありますし、本土風に朝食に焼き魚や、焼き海苔ありで、いろいろです。おやつにはサーターテンプラを作りました。決められた献立の他にソーキ汁や足デビチの煮付けなど我が家のメニューもプラスしました。

会社勤めをしていましたので、民泊の間は、休暇を取り対応しました。その頃は大変忙しい思いをしたのですが、受け入れをした子供たちとは今も交流が続いており、結婚しました、子供が産まれました、と便りが届きます。

仲眞　私も民泊を引き受けましたけれど、今でも年賀状、暑中見舞い、お中元、お歳暮が来ます。富山のメンバーを受け入れたんですが、その後、立山にも連れて行ってもらいましたし、能登半島も案内してもらって、今でも交流を続けています。

食事は決められたメニューがありましたが、わが家でもわが家のメニューをプラスして出していました。それを喜んでくれました。そういう意味では国体があって、民泊を受け入れて地域がまとまったし、子どもたちの視野が広がったと思います。よかったなと感謝しています。

安里　うちも民泊しました。ぼくらの場合は高校の部のバスケットを受け入れたんですが、食事に関しては部落（南浜）で相談をして、集落センターでご婦人たちが交代で食事を作り、寝泊まりは各家で、という方法を取りました。集落ごとにやり方が違っていましたね。


海邦国体で民泊した子供達

伊佐　事務局をしていましたが、選手たちが帰るころにはへとへとになっていました。玄関で座っていつのまにかうとうとして、子供たちに笑われたりしました。事務局では、民泊の受け入れ先を決める前に、まず料理の講習から始めたんです。講習を受けたら、いつも家庭で作っている料理がほとんどですから、「ああこれならうちでもできる」ということになった。最初はうまくいくかどうか、不安でした。

司会　事務局の作戦が成功したんですね。仲松さんは長年、婦人会で活動されていらっしゃいますね。

一声かければ心を一つにする、村民性

仲松　支部長の頃、共に活動していた友人が村婦連の会長になり、手伝いを頼まれましたので、私が手伝える事があればと、引き受けたのが始まりで、会計をし、副会長、会長、監査、顧問と続いています。婦人会の役員をして良かったことは多くの人と出会え、多くの友人が出来た事、そして多くの学習の場を得、学んだ事です。村内の活動だけではなく、地区もありますし、県もあります。会合や行事のときは地区、県内から多くの会員が集まりますので、婦人会で活動していなければ決して出会

うことのない人達です。役職は退いても、月に一度は歴代の役員が集まりユンタク会をもっています。婦人会に協力できることはないか、と情報交換をして懇親を深めています。年に一度は旅行にも行きます。

婦人会は時代のニーズにあった活動をしていますが、生活に関わるテーマではゴミ問題など、村より早い取り組みをしました。現在、村では資源ゴミの収集をしていますが、以前は婦人会で、資源ゴミのアルミ缶や、古紙を集め、業者に売った利益や、村から支給される報奨金で活動資金を作っていました。婦人学級で、EM菌を使った生ゴミの肥料作りも学習し、生ゴミの減量化にも取り組みました。村より生ゴミ処理容器の補助金を貰い各家庭で肥料を作り、家庭菜園や花園等に利用しました。支部によっては生活に関わる独自で地域にあった様々な活動をしています。

司会　青年会は元気がないようですが、婦人会はまだまだ…。

仲松　でも、一番の課題は会員が減少したことです。支部も減り、会員も大分減りました。昭和四十四年頃には、一、一〇〇名以上もいた会員が、平成二十年度は二〇〇名余にまで減っています。中城村は、もともとの十八行政区から、団地等ができたことで二十二行政区になっていますが、そのうちの七行政区しか婦人会がありません。時代が変わったのだ、と思いますが、支部を増やし会員をどう増やすかが、現在の大きな課題です。

それと、婦人会は大所帯なものですから、村の行事があるときには婦人会に動員がかかります。自主事業より協力事業が多く、役員や会員は動員が多くて大変です。また、役員のなり手がいないのも悩みです。休眠している支部も役員のなり手がいれば結成できるのですが、若い会員が少なく役員が続かないのが現状です。会員のなり手は、子どもの部活や塾の送り迎え、子育てに忙しくて婦人会活動をする時間がないようです。



新垣　中城村の問題は、普天間高校や中部商業高校へのバス路線がないこと。親としてはどうしても送り迎えすることになる。バス路線の不便さが解消されれば親の負担も減るはずです。

仲松　婦人会の執行部も、子どものことを理由に挙げられると(加入の)強制は出来ません。私たちも子育てが終わった年代ですから、今は子育てに専念し、子育てが終わったら婦人会活動を頑張って、という感じですね。

伊佐　婦人会や青年会の活動が鈍くなっているのは、活動の場所が確保されていないからなのでは、ということで、村では平成六年に上は青年会、下は婦人会の二階建ての事務所を建設しました。

仲松　新垣盛繁元村長のときに建ててもらいました。婦人会や青年会の活動は、勤めの関係上通常午後五時後です。公共の施設は午後十時までしか利用できなくて、時間が足りず、満足な活動が出来ないとの事で、村に要請し、独自の事務所を建ててもらいました。プレハブですが二階建てで、二階に青年会の事務所、一階に婦人会の事務所と会議室があります。事務所ができてからは、時間が遅くなっても、気兼ねなく活動や会議ができるようになりました。県内でも、婦人会が独自の事務所を持っているのは中城村だけです。



婦人会による資源ゴミのリサイクル活動

これまで青年会、PTA、婦人会と活動をしてきましたが、先輩が一声掛けると、誰となく集まってきて協力する体制が出来ています。先人から受け継いだ村民性だと思います。

仲眞　伊佐実さん、(仲松)和枝さんとは青年会でいっしょに活動していましたからね。知念先生にはPTAでもお世話になりました。青年会でもPTAでも、いろんな人たちとの関わりやボランティアの地域活動が大きなウエイトを占めています。なにかあったら相談に乗っていただけるし、力を貸していただく、これからもみんなが力を合わせてやっていける地域を目指し、そういうことを大切にしていきたい、と思います。

知念　戦後の中城村を支えたPTAの力は大きかった。戦後の茅葺き校舎は、津覇小でも中小でも中でもPTAが作った。もう一つ、戦後中城中学校に、沖縄県で戦後初めての保健室ができました。これもPTAが作った。

戦後教育の現場では、(安里)英一たちは知っていると思うんですけれど、ヌチカジリー(一生懸命。一つの所を得たら、それに命を懸ける)という言葉が流行していました。戦後タバコ1ボール三〇〇円の時代に、教員の給料は二八〇円、だから、教員の有資格者が教職を去って、軍作業に出たんです。ですから、当時の学校長は教員を集めるのに非常に困っていました。ヌチカジリーだよ、という言葉を胸に秘めて、夜遅くまで教員は一生懸命になってやりました。そういう意味で、当時の二十代の若い先生たちは軸足は子供と、教育に対してヌチカジリーで奮闘した。その基礎の上に昭和三十年代四十年代、そして今がある。PTAの力と先生たちの、私より公というものを重んじる風潮と教育にかける情

熱に燃えていた。生徒たちも一緒でした。

仲眞　われわれがＰＴＡのころも、先生たちと一体となって、これから社会を支えていくのは子どもたちだという気持ちをいつも持っていました。今でも施設が足りないと言われていますが、昔はもっと足りなかった。図書室の本も足りないし、グラウンドも荒れているし、そんな中でみんなが力を合わせてやってきた。そういう結果だと思います。これからも力を合わせていけば、もっともっとすばらしい中城村になる。

知念　教育中城、という言葉が戦前からあり、戦後もそういう姿勢が貫かれていました。

安里　戦後の先生方は大変だったと思います。というのは、私は小学校三年でしたけれど、教科書もないし帳面もないし、どうやって勉強したのか、よく覚えていないような状況でした。先ほど伊佐さんが話していましたけれど、教職員や公務員にはだれもなりたがらなかった。私も復帰前に建築会社で働いていましたけれど、七十ドルもらえたんです。辞めて自治会長になり、復帰後ドルから円に替わったら二万八〇〇〇円の手当でびっくりしました。これでは生活できないので、また建設業に戻りました。ですからあのとき役場に入って定年まで勤めた（伊佐）実さんは大変えらいな、と感心しています。

知念　中城村民として誇りを持つということ。中城で自慢できるものは何か、というと五つあります。まず温かいheart（心）。それから二つめはhead（頭脳）。現在、中城の特産物に付加価値をつけた開発研究が極めて活発で、農業加工品とか村の特産品が生まれています。子どもたちも発想が豊かです。三つめにhand（手）。よく働く、誠実で勤勉、かたつむりのように絶えざる歩み、勤勉さが中城村の特徴です。四つめはhealth（健康）。スポーツが大変盛んで、健康問題に関心が高い。最後はhope（希望）。個性豊かな人材。芸術的な面においても、優れている。明るい希望を持った村です。中城村の村民としての誇りを持って生きていって欲しい。

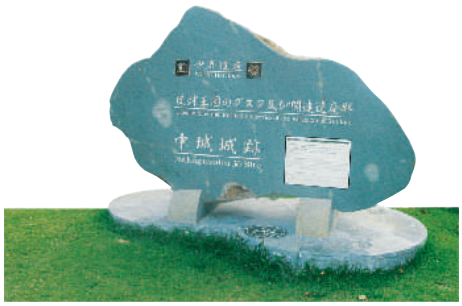
仲眞　振り返ると、四十五年ほど生涯スポーツや生涯学習に関わってきました。これまで体協にしても行政に頼ることが多かったのですが、今後はそこから脱皮して、自分たちでスポーツクラブを立ち上げて、受益者負担、自主運営、自主企画、自主計画を目指します。今年（平成二十一年）の三月七日に、吉の浦総合スポーツというクラブを立ち上げました。これは生涯学習、地域の力を高めるということもありますが、みんなが健康で明るく、たくましい地域を作るために、子どもから大人まで集える場所を作ろう、というものです。少年野球の指導をしたり、中学校の陸上競技のクラブ活動をしたり、ゲートボールを通じて底辺を広げる。そしてチャンピオンも育ててみたい。中城からはボクシングの浜田剛という世界チャンピオンが生まれました。大相撲の琉鵬もいる。こういった人たちを目標として、彼らに続く人材をバックアップし、育てていきたい。また、老人の健康、介護を考えたスポーツクラブにし、地域力を高めていきたいと思います。

知念　中城村には世界遺産の中城城がありますね。これこそ中城村民の向かうべき方向ではないか。千古動かずそびえたつ中城城のようにたくましく、個性、徳性豊かな村民を目指していくということが大切ではないか。

司会　本日はお忙しいところ、お集まりいただきありがとうございました。これで座談会を終わります。

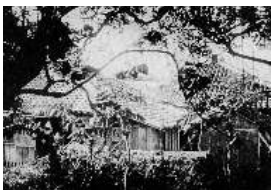


世界遺産・中城城跡



世界遺産・記念碑

年表

年代	1908（明治41）年	1909（明治42）年	1910（明治43）年
中城村に関するできごと	1・1 **沖縄県内　間切島を村に、村を字に改称する** 1・4 伊舎堂の和仁屋蒲吉　県庁で開催された養老式に招かれる 1・30 伊舎堂村の耕作当が比嘉竈新から安里亀助に替わる 4・1 **大田為淳　初代中城村長に就任** 4・28 沖縄県及び島嶼町村制　施行 第一回ブラジル移民出発 10・10 津覇尋常小学校において中城重要物産品評会が開催される 10・20 中城尋常高等小学校・津覇尋常小学校の校医が渡口精鴻より渡口三良に替わる  中城城跡内　中城村役場	4・4 中城村長大田為淳氏の功績表彰会が中城尋常高等小学校において開催される 5・3 中城村村会議員二十名決まる 5・11 初の県会議員選挙実施される 8・22 中城師友会第一回総会が中城尋常小学校で開催される この年から明治四三年にかけて村内各字青年会の設立・総会が相次ぐ	1・4 県庁において養老式開催　中城村より五名が招かれる 2・3 津覇校の児童　第一艦隊乗組員の行軍見学で那覇への遠足 4・13 ネズミとハブ駆除のためインドマングースが移入される 10・ 沖縄製糖株式会社設立される 10・ 三日／津覇尋常小学校　七日／中城尋常高等小学校　卒業生第一回教育召集発会式開催 10・10 和宇慶青年会設立 10・13 中城尋常高等小学校において中城青年会総会が開催される 10・30 津覇尋常小学校　秋期運動会が津覇馬場において開催される 11・20 中城尋常高等小学校において新兵送別会が開催される 12・ 六日／安里青年会設立　一二日／伊集青年会設立 12・26 津覇学区の伊集・和宇慶・津覇・奥間・安里・当間の青年会長会　その他協議会が開催される 明治四三年度中城村（現北中城村含む）戸数／三、五一一戸　人口／一八、九四二人
沖縄に関するできごと	間切・島および村を村および字と改称	府県制（特例）施行 初の県会議員選挙実施 はじめて分蜜糖を製糖	ネズミと蛇の駆除にインド産マングース移入 那覇区に電話開通

1913～

1911（明治44）年

1・
1・26　二一日／屋宜青年会　二二日／伊舎堂青年会　二六日／久場青年会　総会を開催
那覇／首里間に電話が開通
1・29　中城校訓導比嘉春平・津覇校准訓導新垣孫久　同郡教育部会教育功労者として表彰される
2・11　津覇校長松本維栄、中城村長大田為淳、文部省教育功労者として選奨される
3・25　大田村長・松元校長二氏の選奨祝賀会　津覇校において開催
4・16　帝国在郷軍人会沖縄支部中城村分会発開式　中城尋常高等小学校において開催される
6・22　村民四人を原告とする「移民見せ金に関する事件」の判決下る
7・22　村青年会の第二回総会　中城尋常高等小学校で開催
11・18　中城校　卒業生を召集

河上肇の講演事件おこる
伊波普猷『古琉球』著す

1912（大正元）年

1・5　明治四三年末調査中城村（現北中城村含む）戸数／三、五二九戸　人口／一七、八七〇人
2・10　中城村産業組合設立総会　津覇小学校にて開催される
安里徳明　第二代中城村長に就任
5・　初の衆議院議員選挙実施される
5・15　「**大正**」**へ改元**
7・30　中城村信用購買生産組合設置登記（理事長新垣盛善　喜納昌松　他四人）
9・7　卒業生召集会が中城尋常高等小学校で開催される
10・30

衆議院議員選挙法施行
（宮古・八重山除き定員二名）

1913（大正2）年

1・7　村役場より津覇尋常小学校の校舎増改築請負工事の公告
1・10　大田為正　陸軍三等軍医に任命される
2・8　大田為正　中城・喜舎場両小学校の校医に委嘱される
2・23　第一回村教育会が中城尋常高等小学校で開催される
3・20　大田為正　叙位（正八位）
3・21　中城校二名・喜舎場校二名・津覇校四名　優良児童として表彰される
9・　中城村字上原に津覇尋常小学校の分教場ができる

ユタの取り締まり強化される
アルゼンチン移民十四人
ブラジル移民禁止

年代	1914（大正3）年	1915（大正4）年	1916（大正5）年	1917（大正6）年
中城村に関するできごと	3・24 村民四人を被告とする「ハワイ移民見せ金事件」の判決下る 5・ 那覇／首里間に電車開通 6・28 **サラエボ事件** 7・ **第一次世界大戦　勃発** 10・12 人車軌道の西原小那覇／中城津覇間の工事進行中 12・13 久場の比嘉蒲　中頭郡畜産品評会　豚の部で二等となる	3・10 比嘉定英（中城校）大城カマド（喜舎場校）新垣蒲吉（津覇校）　優良児童として表彰される 7・11 津覇／当間間　馬車軌道開通記念として大相撲大会が開催される 8・28 当間の綱引きが七年ぶりに開催される	5・31 村会議員選挙が行われる 6・24 春季原勝負褒賞授与式が村役場において開催される 8・ 中城尋常高等小学校　字屋宜への移転が決定 9・1 中城尋常高等小学校　校舎増改築工事請負の公告	1・ 中城・宜野湾・浦添　三村のサトウキビ農家　沖縄製糖（株）の甘蔗非売運動を起こす 3・28 安里カマ・小橋川賀真（中城校）喜屋武オタク（喜舎場校）瀬名波ウタ（津覇校）優良児童として表彰される 11・13 戦死者の招魂祭が中城城跡内忠魂碑前で挙行される  優良児童表彰
沖縄に関するできごと	那覇 与那原間に軽便鉄道開通			初のキューバ移民 ブラジル移民解禁二、一三八人

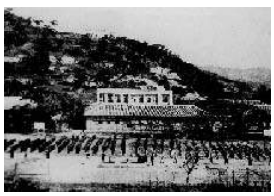
1922～

1918（大正7）年	1919（大正8）年	1920（大正9）年	1921（大正10）年	1922（大正11）年
1・4 県庁において養老式開催　津覇の玉那覇カマが出席 3・28 安里ウト・喜屋武盛良（中城校）浦崎ツイ（喜舎場校）桃原廣永（津覇校）優良児童として表彰される 5・ 津覇・奥間・添石・伊舎堂・荻道で豚疫病発生　宜野湾村にも拡大の兆し 8・3 富山県にて米騒動勃発 11・11 **第一次世界大戦　終結** この年　甘蔗「沖縄一号」誕生		1・10 **国際連盟成立** 4・ **比嘉亀瞬　第三代中城村長に就任** 津覇尋常小学校に高等科を併置　校名を津覇尋常高等小学校と改称		
ブラジル移民二、二〇四人	衆議院議員選挙法が改正され、宮古・八重山を加え定員五人となる 辻町大火。 はじめてボリビア移民一人 宮古・八重山にコレラ流行	市町村制・府県制の特例撤廃で本土並の地法制度となる	皇太子、渡欧の途次来県 沖縄初のメーデー行われる	

年代	1923（大正12）年	1924（大正13）年	1925（大正14）年	1926（昭和元）年	1927（昭和2）年	1928（昭和3）年
	9・1	3・10	5・	12・25		6・18
中城村に関するできごと	関東大震災	県会議事堂で県下青年団長協議会が開催　村青年団津覇分団が優良団体として表彰される 5・ サトウキビの大茎種ＰＯＪ二七二五号　台湾から導入 7・5 中城村村会議員二五名決まる **村長選挙　再選挙の結果比嘉亀舜が村長となる** 11・ 津覇にスルル虫蔓延　村民あげて駆除に努める	大田為正　県会議員となる	**「昭和」へ改元**		村長選挙実施（任期満了一ヶ月前）　その後政争となり県がこれを取り消す **安里徳明　第四代中城村長に就任**
沖縄に関するできごと	このころ県外出稼ぎ多くなる	戦後恐慌強まる（ソテツ地獄）	人口五五万七、九九三人 那覇東町で大火。	宮古・八重山島庁をそれぞれ支庁と改称 第五一帝国議会「沖縄救済ニ関スル建議案」を可決 帝国議会、工業助成十カ年計画を決定		この年、工場争議多発する 特別高等警察課設置（特高）

1934～

1929（昭和4）年	1930（昭和5）年	1931（昭和6）年	1932（昭和7）年	1933（昭和8）年	1934（昭和9）年
5・14 大田為正　普選第一次の県会議員となる 伊佐善俊　県会議員となる	7・16 渡嘉敷真睦　沖縄県視学となる 暴風雨の影響による潮害で中城村東海岸のサトウキビがほぼ全滅	3・ **伊佐善俊　第五代中城村長に就任** 4・10 昭和五年末の中城村の海外移民数／三、〇五二名（県下一） 11・ この頃シルークルーの争い盛ん 12・24 津覇部落にて腸チフス類似症で二〇名余が死亡	1・20 津覇で蔓延した熱病「エーパラチフス」と判明 7・ 政争激化　国庫補助の災害復旧費を村会にて否決する	3・3 村会　村長の報酬を年額百円と決定 3・27 日本　国際連盟を脱退	4・2 村長派・反村長派の政争解消のため挙村一致の事業「護佐丸神社」建立決定 5・17 村長伊佐善俊「肥料疑獄問題」で起訴される
社会科学研究会事件おこる	農村疲弊により小学生の欠席や欠食および人身売買多くなる		ブラジル移民二、三〇〇人		干ばつ続き、久米島・宮古・八重山を中心に食糧が欠乏する

年代	1935（昭和10）年	1936（昭和11）年	1937（昭和12）年	1938（昭和13）年	1939（昭和14）年
中城村に関するできごと	3・ **伊佐常喜　第六代中城村長に就任** 10・21 中城郵便局　郵便集配業務開始	7・ 標準語の普及が奨励される　この頃「方言札」が使用される 10・6 飢饉に瀕し夜警団を組織　芋泥棒を防ぐ 11・ 沖縄日報主催「沖縄八勝」の投票で中城城跡当選	6・3 伊佐常喜　県会議員に当選 10・ 奥間で「芋炊き競技」が行われる	3・31 国家総動員法　公布 4・28 伊舎堂への共同製糖場設置が県により正式に許可される 5・24 中城城下忠魂碑前で翌日出発する特務兵の歓送会を盛大に挙行 5・ 津覇尋常高等小学校　文部省より体操優良校表彰を受ける 6・4 県体協主催学童排籠球大会　津覇小学校の尋常科男女　籠球の部で準優勝 この年村出身の我謝栄彦が比謝川一号（甘藷）の交配に成功する  津覇尋常高等小学校	2・28 伊佐常喜　沖縄県財政調査会委員となる 5・29 第七回学童排籠球大会が普天間校で開催　尋常科男子／津覇校　高等科男子／喜舎場校　優勝 7・16 普天間小学校で開催された郡学童野球大会で中城校優勝 7・30 戦争未亡人の比嘉ミエ（久場出身）国より教員養成所入所を許可される 8・3 墨洋丸遭難者三九名のうち村出身者十一名帰郷する 8・12 中城村　県より繭増産規範並びに養蚕実行組合に選定される 8・14 沖縄県全市町村に警防団結成される 9・3 全国青年学校相撲大会沖縄県予選　津覇青年学校　奥浜真正が一位となる 11・25 県経済更生課副業係主催　第一回帽子編競技会　中城村の宮平キヨが一等となる 12・19 来春の祝寿金を受ける高齢者　宮城カマト（当間）和仁屋蒲瑞（伊舎堂）島袋カメシャ（泊）
沖縄に関するできごと	人口五九万二、一三九人 宮古の久松五勇士、海軍より表彰される このころ漁業従事者三、二七〇人が東南アジアで活動				国民精神総動員事務局設置 満州へ十五万人の移住計画

1943～

1940（昭和15）年

1・　和宇慶　警防団による労力奉仕や指導によりシルークルー対立が解消
2・26　中城村農業総代会が役場で開催される
3・19　津覇が昭和十四年度荒廃林地復旧事業対象地区に決定
4・22　飯米切符制度実施
4・23　喜屋武信市（津覇出身）を含むハワイからの母県視察観光団が帰郷
7・1　中城村会議員二四名決まる
7・7　この頃中城村の戸数／三、七七九戸
8・8　全国女子青年団指導員満州視察　沖縄県から中城小学校訓導宮城栄子が参加
9・7　登又の仲村渠喜竹　第三次義勇軍八名の一人に選ばれる
10・23　県主催第二回パナマ帽子編成競技会　中城村の宮平キヨが優勝
12・　中城校に英霊の室が設けられる

1941（昭和16）年

3・19　昭和十四年度県税完納村として表彰される
4・1　「国民学校令」施行
4・5　村内小学校は喜舎場国民学校・中城国民学校・津覇国民学校となる
7・　安里盛義（伊舎堂出身）陸軍操縦候補生試験に合格
比嘉優之　第七代中城村長に就任
9・30　中頭郡畜産組合の会長に伊佐常喜が選出される
11・23　新穀感謝祭に比嘉正宜の甘蔗二十本が新穀として明治神宮に奉納される
12・8　**真珠湾攻撃**

1942（昭和17）年

4・　県議会議員選挙　村から比嘉永喜が当選
4・16　県庁で勲六等瑞宝章受章伝達式　村から渡嘉敷真睦が受章
4・26　奥間農事実行組合　帝国農会より戦時下食料増産の優秀部落として表彰される

1943（昭和18）年

1・17　宮城條善　県医師会の中頭郡支部長になる
2・2　納税成績優良町村として熊本財務局より表彰される
8・18　比嘉秀盛　中城村助役として県から正式に認可される
12・1　第一回学徒出陣
12・4　中城村書記比嘉岩男　戸籍吏員職務功労者として司法大臣から表彰される

「沖縄日報」「沖縄朝日新聞」「琉球新報」が統合され「沖縄新報」となる（一県一紙）
方言論争おこる
伊良部丸遭難事件おこる

年代	1944（昭和19）年	1945（昭和20）年	1946（昭和21）年	1947（昭和22）年	1948（昭和23）年
中城村に関するできごと	2・22 比嘉優之　中城村農業会会長として県より認可される 7・　沖縄の老幼婦女子　南九州と台湾への疎開開始 8・　学童疎開始まる　**村児童は熊本へ出発** 10・10 十・十空襲 12・5 伊舎堂保育園　皇后陛下よりの奨励賜金決定（県庁にて伝達式）	1・13 我謝栄彦が栽培研究した比謝川一号（甘藷）の苗　増産必要地域への優先的配布決定 3・23 **中城村域　米軍の空襲を受ける** 4・1 米軍　北谷・嘉手納海岸から沖縄本島へ上陸 8・6 広島に原爆投下される 8・9 長崎に原爆投下される 8・14 **ポツダム宣言受諾**	1・29 **北緯二九度以南の南西諸島が日本から行政分離　四月　琉球中央政府設立** 1・　避難・疎開地から村民が帰村 4・4 **比嘉優之　米軍政府より中城村長に任命される** 4・20 戦火により庁舎が焼失　当間の民家に仮役所を設置（後日奥間に正式設置） 5・　**比嘉成一　第八代中城村長に就任** 5・20 **中城村から分村し「北中城村」が誕生（初代村長　与嶺永喜）** 10・ 学童疎開児童　帰還	11・23 軍政府より中城城跡公園指定計画の提示を受ける	3・ **渡嘉敷真睦　第九代中城村長に就任** 4・ 中城中学校が実業高等学校跡地に開校（初代校長　呉屋尚紀） 5・ 中城村役場が奥間から中城国民学校跡地に移転 中城公園整備事業　着手
沖縄に関するできごと	南西諸島に大本営直轄の第三十二軍新設 本土・台湾への集団疎開決定 各町村に防衛隊編成される 対馬丸遭難 大空襲受ける（十・十空襲）	三月米軍の沖縄上陸 六月日本の沖縄地上部隊壊滅する 米海軍軍政府布告（ミニッツ布告）公布 九月七日、日本軍降伏文書に調印	マッカーサー、日本と南西諸島の行政分離宣言 本土疎開者の引き揚げはじまる	沖縄全島の昼間通行許可 沖縄人民党結成	軍指令による市町村選挙 通過を軍票B円に全琉統一 伊江島波止場で米軍弾薬輸送船爆発（死者一〇六人） 琉球切手発行

1953～

1949（昭和24）年	1950（昭和25）年	1951（昭和26）年	1952（昭和27）年	1953（昭和28）年
12・12 中城中学校が中城国民学校跡地に移転（移転について賛否激論） 中城村議会　公園計画協議　村と民間の共同経営の方針を決定	2・1 「中城公園株式会社」設立　※実務未着手三月に「公園組合」方式に変更 2・ 公園施設（売店・遊技場・闘牛場・レストラン）が完成 3・5 「中城公園」開園式　挙行 ハワイ村人会よりオルガン一台　加州村人会より輪転式謄写機一台　寄贈 9・ **喜屋武盛輝　第十代中城村長に就任**		4・ 中城国民学校を中城小学校に改称	
日本政府、沖縄渡航者にはじめて身分証明書発行 本格的な米軍基地建設はじまる	群島政府の知事及び群島議会議員選挙 アルゼンチン呼寄移民多数出発	沖縄群島議会、日本復帰要請決議 琉球臨時中央政府発足 主席に比嘉秀平 日本復帰促進期成会（沖縄群島有権者の七十二％の署名集める） 琉球大学開学	琉球政府発足（主席・比嘉秀平） 戦後第一回のメーデー 崇元寺石門修復落成 このころ親子ラジオ普及しはじめる	第一回祖国復帰県民総決起大会 土地収用令公布 土地の強制収用おこなわれる 天願事件おこる（米民政府、立法院補選で当選した天願朝行の当選を無効とする） 奄美群島日本復帰

年代	1954（昭和29）年	1955（昭和30）年	1956（昭和31）年	1957（昭和32）年	1958（昭和33）年
中城村に関するできごと	9・ **喜屋武盛輝　第十一代中城村長に再任** 12・21 北上原災害橋梁復旧工事　議決	1・7 中城城跡　琉球政府文化財保護委員会により重要文化財・史跡・名勝に指定 中城城跡内公園用地を高良氏借用 中城城跡本丸へのホテル計画が問題となる　指摘を受け事業者はこれを撤回	4・ 中城小学校北上原分校　開校 中城中学校　全島陸上競技大会優勝		4・17 中城城跡　琉球政府文化財保護委員会により特別史跡に指定される 9・ **喜屋武盛輝　第十二代中城村長に再任**
沖縄に関するできごと	アイゼンハワー米大統領、「沖縄を無期限に管理する」と名言 米民政府、地代一括払いの方針発表 立法院で「土地四原則」を打ちだす 八重山計画移民出発 ボリビア移民団出発 アルゼンチン、ブラジル移民団出発 米民政府、人民党を弾圧 沖縄刑務所で暴動	伊江島・伊佐浜の土地強制収用（武装米兵出動） アジア諸国会議 沖縄の即時日本返還要求を決議 プライス調査団来沖 軍用地問題を調査 南米移住団出発	美里村でスクラップ拾いの婦人、米軍ガードに射殺される プライス勧告発表 土地問題四原則をほとんど否定 プライス勧告に反対する「島ぐるみ闘争」おこる 那覇市長選で人民党の瀬長亀次郎が当選 沖縄の人口八〇万一、〇六五人	高等弁務官制度実施 モーア高等弁務官、瀬長那覇市長追放のために「市長村長選挙法」「市町村自治法」などを改正	通過B円からドルへ切り替え

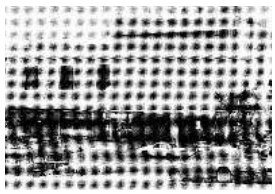
1964～

1959（昭和34）年	1960（昭和35）年	1961（昭和36）年	1962（昭和37）年	1963（昭和38）年	1964（昭和39）年
5・			5・6・7		
新垣盛繁　第十三代中城村長に就任		中城城跡石垣修復事業開始	**新垣盛繁　第十四代中城村長に再任** 中城城跡　琉球政府文化財保護委員会により特別重要文化財に指定される		
石川市宮森小学校に米軍機墜落（死者十七人、負傷者百二十一人） 台風十四号宮古島を襲い多大な被害をもたらす 金武村で米海兵隊が農家の主婦をイノシシと間違えて射殺	沖縄県祖国復帰協議会結成 アイゼンハワー米大統領沖縄訪問	コザで米兵がひき逃げ、少女四人死傷 沖縄の人口八八万一、九六七人	嘉手納村に米軍輸送機墜落	キャラウェイ高等弁務官「自治神話」を演説 祖国復帰県民総決起大会 （北緯二十七度線で本土・沖縄が初の洋上交歓） 久米島航路定期客船のみどり丸沈没 （死者百三十人、行方不明二十六人）	復帰協、辺土岬でたき火集会

年代	1965（昭和40）年	1966（昭和41）年	1967（昭和42）年	1968（昭和43）年	1969（昭和44）年
		3・18	4・21	1・17	
中城村に関するできごと		**中城村合併研究調査委員会設置条例が制定される** 6・13 潮垣線他五四路線　村道認定議決 9・ **城間盛栄　第十五代中城村長に就任**	沖縄の祖国復帰要請　議員発議により採択される 村出身作家　大城立裕氏「カクテルパーティー」芥川賞受賞	琉球石油精製誘致　可決 8・20 水道施設を建設　六七世帯に給水開始 泊農道宇富原線　浜排水路工事　完了	道路建設事業　伊集中央線他十線　完了
沖縄に関するできごと	米軍人・軍属関係の事件事故あいつぐ 佐藤首相来沖、「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、日本の戦後は終わらない」と声明 主席公選運動もりあがる イリオモテヤマネコ発見	裁判移送問題おこる 沖縄の人口九三万四、一六六人	教公二法案審議をデモ隊が実力で阻止 B52が嘉手納基地に飛来 嘉手納空軍基地から廃油流出、井戸水が燃えるほど汚染	アンガー高等弁務官「基地撤去はイモとはだしにもどること」と演説 初の公選主席に屋良朝苗（革新）当選 嘉手納基地でB52墜落炎上	毒ガス兵器の配備がガス漏れ事故で明るみになり撤去運動おこる 佐藤・ニクソン会談で沖縄の七十二年返還決まる

1973～

1970（昭和45）年	1971（昭和46）年	1972（昭和47）年	1973（昭和48）年
5・ 道路建設事業　屋宜被留線他一四線　完了	3・24 東洋石油精製（株）建設のため公有水面埋立地を中城区域に編入	5・15 **本土復帰　沖縄県となる**	3・10 沖縄県土地改良事業団体連合加入　議会承認
ビニールハウス補助事業が導入されキュウリ・ピーマンが初収穫される	10・15 **合併条件の協定撤回される** **宜野湾・中城・北中城の合併　議員の意思統一できず破綻**	中城城跡　日本への復帰に伴い国の史跡に指定される	5・1 村立第一保育所開所　定員六十人
12・23 中城湾への公害産業の進出反対決議採択（公害防止特別委員会設置決議）		12・26 中城村役場増築工事　着手 中城村国民健康保険条例制定（翌年一月一日実施）	9・17 村学校給食共同調理場　建設開始
			12・20 中城村役場庁舎増築工事　落成
具志川村で女子高校生刺傷事件発生	毒ガス移送される	施政権が日本に返還され、沖縄県誕生	米軍、県道一〇四号線を封鎖して実弾演習を実施
戦後初の国会議員選挙実施	十一・一〇ゼネスト県民総決起大会開く	通貨交換はじまる	金武湾を守る会、知事にCTS建設と公有水面埋立て反対の抗議
米兵の主婦轢殺事件に無罪判決	沖縄返還協定、衆院を通過	新知事に屋良朝苗当選	若夏国体開催される
コザで反米騒動発生		自衛隊配備される	
沖縄の人口九四万五、四六五人		土地買い占めによる地価高騰	

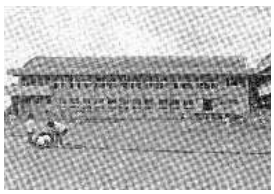


中城村役場庁舎増築工事

年代	1974（昭和49）年	1975（昭和50）年	1976（昭和51）年	1977（昭和52）年	1978（昭和53）年
中城村に関するできごと	4・　村立学校　完全給食制始まる 8・1　那覇広域都市計画の市街化区域　告示 8・31　久場排水路が三面張に改修される	3・20　津覇前原線側溝工事　完了 6・1　村立第二保育所　開所	5・20　中城中学校　体育館　完成 7・4　**新垣盛繁　第十八代中城村長に就任** 11・1　中城村北中城村清掃事務組合　創設	5・14　村老人福祉センター　完成 7・1　中城村商工会　設立 11・26　村慰霊の塔　建立	4・1　村立第三保育所　開所 5・25　中城北中城消防組合　創設 6・21　各自治会巡回行政報告会　開始 7・30　**道路交通方法が変更になる（右側通行から左側通行へ）** 9・30　中城浜漁港整備開始（船揚場・埋立・護岸工事）
沖縄に関するできごと	ラロック証言、在沖米軍基地内における核貯蔵の実態を裏づける	国際海洋博覧会開催される 県CTS用地埋立竣工を認可する 県内完全失業率六％	海洋博後遺症による、企業倒産相つぐ 具志堅用高、Jフライ級世界チャンピオンとなる	ベトナム難民漂着 完全失業率七、九％、雇用不安高まる 学力論争おこる	交通方法変更が実施される（七三〇） 知事選実施、西銘順治（保守）当選 観光客百五十万人に迫る 十二年ぶりのイザイホーおこなわれる


道路法変更


村老人福祉センター


中城中学校体育館

1984～

1979（昭和54）年

3・10　村民憲章・村章・村民の歌制定　ゴミ焼却施設（青葉苑）完成　操業開始
3・31　中城幼稚園・津覇幼稚園　完成
9・20　県土地改良事業　和宇慶地区　開始
10・15　村営水泳プール建設　着手
11・15　地区公園（現在の吉の浦公園）整備始まる
12・22　第一回中城まつり　中城中学校において開催



第一回 中城まつり

基地被害が続発する
CTS訴訟却下される
下地島空港が開港

1980（昭和55）年

7・4　**新垣盛繁　第十九代中城村長に再任**
中城小学校　増改築工事

ソ連原潜、沖縄近海で炎上
軍用機事故続発
拡大する廃油ボール汚染
沖縄の人口百十万六、五九五人

復帰後最悪の長期断水
失業率六、六％
ハンビー飛行場返還
トートーメー（位はい）継承問題で、那覇地裁は女性でも位はい継承は可能との審判下す
国頭村与那覇岳で発見された新種の水鳥にヤンバルクイナと命名する

1981（昭和56）年

3・　久場崎学校（久場崎ハイスクール）米軍用地　返還される
中城小学校運動場整備

教科書の住民虐殺削除が問題化
ダブル選挙で保守が勝つ
ミカンコミバエの根絶宣言
嘉手納基地の周辺住民爆音訴訟おこす

1982（昭和57）年

3・　津覇小学校校舎　完成


久場崎ハイスクール

異常気象にみまわれる
激化する米軍演習、被害も続出

1983（昭和58）年

1984（昭和59）年

3・7・4　登又地区　我謝橋が開通する
新垣盛繁　第二十代中城村長に再任
県土地改良事業　当間地区　開始

前年発見された大型昆虫が新種であることが判明。「ヤンバルテナガコガネ」と命名される

年代	1985（昭和60）年	1986（昭和61）年	1987（昭和62）年	1988（昭和63）年	1989（平成元）年
	4・23	8・9	8・	3・	1・1
	6・21			7・	4・1
	7・29			9・24	6・
	8・				11・3
					12・
中城村に関するできごと	村花・村木・村魚　選定される 中城村国土利用計画　策定 「非核・平和中城宣言」を行う 中城中学校　全日本バレーボール中学生大会　優勝	海邦国体リハーサル（教員バスケットボール）開催される	海邦国体　少年女子バスケットボール大会　開催される  海邦国体 かりゆし大会 聖火リレー	各自治会にコミュニティ掲示板設置（コミュニティ助成事業） **新垣盛繁　第二一代中城村長に再任** 中城浜漁港整備完了　「みなとびらき」開催	村役場の就業時間変更　四週六休制を試験導入 消費税（三％）が導入される 中城村学力対策推進委員会　設置 第一回中城村功労者・善行者表彰式　八四人が表彰される 久場地区土地区画整理事業　完了  久場土地区画整理事業　完了
沖縄に関するできごと	米兵の凶悪事件が続出 宮古島で第一回トライアスロン大会開催 第一回那覇マラソン開催 沖縄の人口百十七万九、一二六人	「日の丸、君が代」で卒・入学式が混乱 泊大橋完成 ミバエ類の根絶事業すすむ	六・二一嘉手納基地包囲大行動 海邦国体、かりゆし大会開催 ウリミバエ根絶 揺れうごく新石垣空港建設問題 沖縄コンベンションセンター開所	米軍演習による被害続出 宮古広域市町村圏が国土庁長官賞受賞 異常気象	新石垣空港で県は白保海域を断念、カラ岳東海岸へ変更 「慰霊の日」休日廃止で紛糾 恩納村都市型戦闘訓練施設建設で村民が反対運動展開

1993～

1990（平成2）年	1991（平成3）年	1992（平成4）年	1993（平成5）年
3・1 コミュニティ掲示板　九ヶ所増設	1・16 村民の憩いとスポーツの場　吉の浦公園　開園	2・28 心身障害者共同作業所　中城睦学園　開所	4・1 村役場に住民情報システム導入
5・1 行政防災無線　供用開始	6・16 第一回中城ハーリーまつり　開催	3・3 中城城跡公有化事業実施　管理権が国際産業から中城村・北中城村両村に移行	8・12 世界遺産委員会コーディネーター　中城城跡を視察
中城城跡管理事務所の設置　計画	9・1 「村づくり基本計画」「村土地利用計画」策定のため各自治会で行政懇談会開催	各自治会に街路灯三二基設置（宝くじ助成事業）	8・26 中城城跡整備基本計画策定委員会　発足
	土曜閉庁（四週六休）制度導入	7・7 **新垣盛繁　第二二代中城村長に再任**	11・17 中城村商工会館　建設着手
	12・7 第一回中城文化まつり　開催	中城村農村環境改善センター（吉の浦会館）建設　着手	11・28 中城村農村環境改善センター（吉の浦会館）　落成
「慰霊の日」休日存続	伊江朝雄参院議院が県出身初の大臣となる	復帰二十年、三次振計決定	全国植樹祭開催
沖水、甲子園で初の準優勝	暴力団追放で県民運動	首里城復元	上原康助、県選出議員として初の開発庁長官に就任
世界のウチナーンチュ大会開催	女性副知事（尚弘子）誕生	新石垣空港で県、宮良案提示	ウリミバエ県内全域で根絶
沖縄諸島のウリミバエ根絶		西表で群発地震	
十二年ぶりに革新知事誕生		中学生の集団暴行致死事件で校内暴力問題化	

年代	1994（平成6）年	1995（平成7）年	1996（平成8）年	1997（平成9）年
中城村に関するできごと	2・24 南上原土地区画整理事業　事業認可される 4・1 花と緑のふれあい広場　整備開始 9・30 中城城跡「公園組合」解散 10・1 中城城跡共同管理協議会　発足	4・ 中城城跡保存修復事業　開始 9・30 第一回中城城まつり　開催 11・19 戦没者刻銘板「平和の波」　平和祈念像「平和の風」　建立	6・18 大城立裕文学碑「中城の心　沖縄の心」　建立 6・30 「戦後引揚者上陸碑」　建立除幕式 7・4 **新垣清徳　第二三代中城村長に就任** 9・7 海外移住者子弟研修　開始 12・17 南上原土地区画整理事業　着工	5・15 各自治会で行政懇談会を開催 5・31 中城・北中城国立組踊劇場誘致緊急村民大会　開催
沖縄に関するできごと	宝珠山長官が基地との共生・共存発言 厚生年金格差是正を閣議決定	「平和の礎」除幕 戦争マラリア補償が決着 米兵の暴行事件に対する県民総決起大会 軍転法成立 知事、代行を拒否	象のオリ、国による「不法占拠」状態となる 普天間飛行場の全面返還合意 代理署名裁判敗訴 基地問題で全国初の県民投票	米軍用地特措法改定で、強制使用の期限切れ後も暫定使用が可能となる 名護市住民投票で海上基地反対派が多数占めるが、市町は受入れを表明 県道一〇四号線越え演習に終止符


南上原土地区画整理事業 認可


第一回 中城城まつり


平和の波 平和の風

2001～

1998（平成10）年

3・31　中城村公式サイト「なかぐすく浪漫」開設
5・30　中城小学校　体育館　落成
6・19　伊集農業構造改善センター　着工
10・28　第二回中城まつり　開催

1999（平成11）年

5・15　中城小学校　水泳プール開き　全児童が参加
6・25　中城城跡の世界遺産登録への推薦が文化庁で正式決定される
11・2　エコ・コースト事業　着工

2000（平成12）年

1・7　**ハワイ県人移住百周年**
1・29　世界遺産現地調査委員　中城城跡へ来訪
5・20　津覇小学校　体育館　落成
7・4　**新垣清徳　第二四代中城村長に再任**
8・　**九州・沖縄サミット　先進国首脳会合　開催**
12・2　**中城城跡が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録される**



世界遺産登録

2001（平成13）年

4・16　世界遺産登録記念グスクシンポジウム開催（中城村・北中城村・勝連町・読谷村）
9・6　中城村人材育成講座「中城とよむ塾」開設
9・19　世界遺産登録認定証交付式
11・5　世界のウチナーンチュ大会　ナカグスクンチュ交流会　開催



世界のウチナーンチュ大会
ナカグスクンチュ交流会

異常気象でサンゴの白化現象
海上基地建設予定地でジュゴン確認
知事選で保守派候補の稲嶺恵一が当選

沖尚、県勢初の甲子園優勝
漫湖がラムサール条約に指定
米軍機の事故あいつぐ
新資料館内容変更問題おこる

九州・沖縄サミット開催「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」が世界遺産に登録
新石垣空港建設地を決定
平和の礎で米大統領演説
三十二年ぶりに那覇市に保守市制誕生
ハワイ、カナダで移民百周年

沖縄開発庁が内閣府沖縄部局へ移管
九・一一米国中枢同時テロの影響で観光産業に打撃
失業率過去最悪の九、四%記録
ハンセン病訴訟で「人権回復」

年代	2002（平成14）年	2003（平成15）年	2004（平成16）年
中城村に関するできごと	2・　中城小学校　全館防音空調施設工事　完了 4・　伊集後川・当間後里川　災害復旧工事　着工 6・15　歴史の道・ハンタ道整備　着手 6・29　中城ハーリーまつり　開催 8・1　中城村人口　一万五千人　達成  村人口一万五千人達成	2・9　中城小学校　創立百二十周年記念式典 4・4　ごみ処理施設「青葉苑」新築火入れ式 5・　中城村・北中城村　合併協議　住民説明会 7・　ＬＮＧ火力発電所誘致　住民説明会 11・11　**中城村・北中城村合併協議会　設置**  吉の浦火力発電所 住民説明会（久場）	3・30　電源立地地元協議会　開催 4・22　中城村・北中城村合併シンポジウム　開催 7・4　**新垣清徳　第二五代中城村長に再任** 11・13　城間盛栄氏　県自治功労者章　受章 11・21　デンマーク王配ヘンリック殿下　中城城跡視察
沖縄に関するできごと	普天間代替基地「埋め立て」で合意 長期不況で雇用不安つづく 中城港湾の泡瀬地区埋め立て工事着手 米軍関係の事件事故あいつぐ 新沖縄振興法が成立	沖縄で戦後初の軌道交通となるモノレール（ゆいレール）発進 長寿の危機で緊急アピール 沖縄県男性の平均寿命が全国四位から二十六位に急落 大学院大学、恩納村に決定 宮里藍、最年少プロ入り、初優勝	沖縄国際大学に普天間飛行場所属のCH53「大型ヘリ」が墜落炎上 米軍は現場一帯を封鎖して事故処理・日米地位協定の矛盾を露呈 辺野古沖ボーリング調査着手 宮古農林高校環境班が「水のノーベル賞」を受賞 台風、最多十五個接近

2008～

2005（平成17）年

1・14　北中城村　中城村との合併協議会廃止を申し入れ
2・24　中城村臨時議会において合併協議会廃止を決議
3・24　泊の大クワディーサー　沖縄の名木百選に認定
5・31　村行財政検討委員会　村議会議員・農業委員の定数削減を答申
6・13　津覇小学校南上原分校　建設工事　着工


泊の大クワディーサー

日米両政府が普天間飛行場のヘリ部隊移設地をキャンプ・シュワブ沿岸部で合意
興南高校ハンド部全国三冠

2006（平成18）年

1・29　**ペルー県人移住百周年**
3・3　中城城跡　日本の名城百選に認定される
4・　各自治会で行政懇談会を開催
6・10　北上原地区・安里地区で大規模地すべり土砂災害発生
最大時　避難指示四九世帯一七四人　避難勧告三十三世帯一〇八人
10・　世界のウチナーンチュ大会　中城村人交流会開催


北上原地区・安里地区
大規模地すべり

普天間代替基地の「V字滑走路案」などで日米合意
飲酒運転追放の世論高まる
県工事談合で百五十二社処分
八重山商工が春・夏の甲子園で活躍
米陸軍パトリオット・ミサイルを配備

2007（平成19）年

5・10　吉の浦火力発電所建設　本格着工
5・27　国・県・市町村合同防災避難訓練実施
12・10　土砂災害に伴う避難勧告・避難指示　全解除
12・23　わかてだを見る集い　十周年記念まつり実施



わかてだを見る集い

教科書検定意見の撤回求め県民大会開催
全国学力テストで沖縄全教科で最下位
県立博物館・美術館開館
沖縄市長泡瀬埋め立て一区容認、二区見直し

2008（平成20）年

3・　児童館兼保育所　建設計画着手
3・27　産業高度化地域指定認可
4・1　**中城村制施行百周年**
ブラジル・アルゼンチン移民百周年



中城村制施行百周年



第三章
中城村の現在

中城城跡の世界遺産登録

二〇〇〇年（平成十二）十二月二日

［世界遺産］

世界遺産とは、世界中の国々に残されているすばらしい自然環境や文化財の中から優れているものや貴重なものを人類共通の遺産（財産）として、世界中が協力して保護し、未来へ伝えていこうという考えから生まれたものです。一九七二年（昭和四十七）にユネスコ（国連教育科学文化機関）により「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」が作られ、その条約加盟国の文化財と自然環境の中から特に重要と判断されるものが「世界遺産リスト」に登録されることになりました。世界遺産は、文化遺産・自然遺産・文化と自然の複合遺産の三種類に分けられ、二〇〇八年末までに文化遺産六七九件、自然遺産一七四件、複合遺産二十五件の合計八七八件が世界遺産として登録されています。

日本は一九九二年（平成四年）にこの条約に加盟しました。そして、二〇〇〇年（平成十二）十二月二日に中城城跡は、首里城跡、今帰仁城跡、座喜味城跡、勝連城跡、園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園、斎場御嶽とともに「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産（文化遺産）に登録されました。日本の世界遺産としては十一番目の登録でした。

「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、琉球が王国の統一に向けて動き始める十四世紀後半から、王国が確立した後の十八世紀末にかけて、海外貿易等を通して周辺地域の影響を受けながらも琉球地方独自の文化を形成していった、その特徴ある文化を表す遺産群であるという評価を受けました。

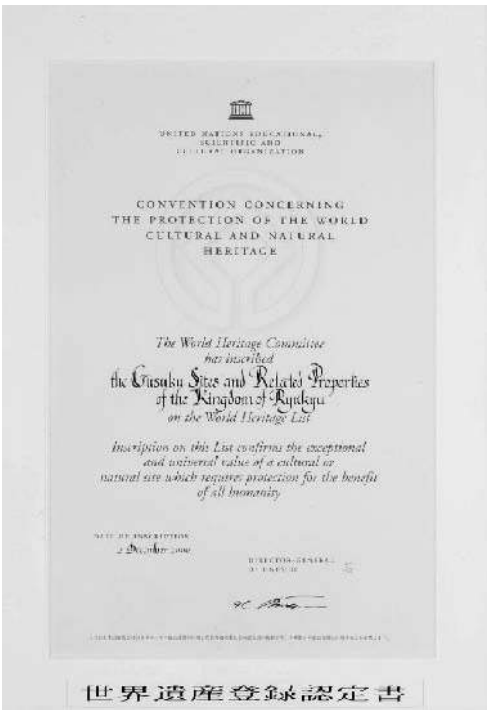
その中で中城城跡は、首里王府に対抗していた勝連城主の阿麻和利を牽制するために、座喜味城主であった護佐丸が国王の命により移り住んだ城で、琉球王国の王権が安定していく過程で重要な役割を果たした遺産であるという位置づけがなされています。



世界遺産群の分布図
❶首里城跡（しゅりじょうあと）那覇市
❷斎場御嶽（せーふぁうたき）南城市知念
❸玉陵（たまうどぅん）那覇市
❹識名園（しきなえん）那覇市
❺園比屋武御嶽石門（すめひゃんうたきいしもん）那覇市
❻中城城跡（なかぐすくじょうあと）中城村・北中城村
❼勝連城跡（かつれんじょうあと）うるま市
❽今帰仁城跡（なきじんじょうあと）今帰仁村
❾座喜味城跡（ざきみじょうあと）読谷村

［登録基準］

世界遺産に登録されるには、世界遺産委員会が定めたC（i）～C（vi）の6つの基準のうち1つ以上の基準を満していなければなりません。そのうち「琉球王国のグスク及び関連遺産群」に適合するとされた基準は下記のC（ii）、C（iii）、C（vi）の3つでした。


CONVENTION CONCERNING
THE PROTECTION OF THE WORLD
CULTURAL AND NATURAL
HERITAGE

The World Heritage Committee
has inscribed
the Gusuku Sites and Related Properties
of the Kingdom of Ryukyu
on the World Heritage List

Inscription on this List confirms the exceptional
and universal value of a cultural or
natural site which requires protection for the benefit
of all humanity

世界遺産登録認定書

C（ii）：ある期間を通じて、又はある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。

［評価］数世紀もの間、琉球諸島は東南アジア、中国、韓国、そして日本との経済的・文化的交流の中心地として貢献してきた。このことは、今に残された祈念工作物群（城跡・御嶽・陵墓・庭園）によって明瞭に示されている。

C（iii）：現存する又は消滅した、文化的伝統又は文明の、唯一の又は少なくとも希な証拠となるもの。

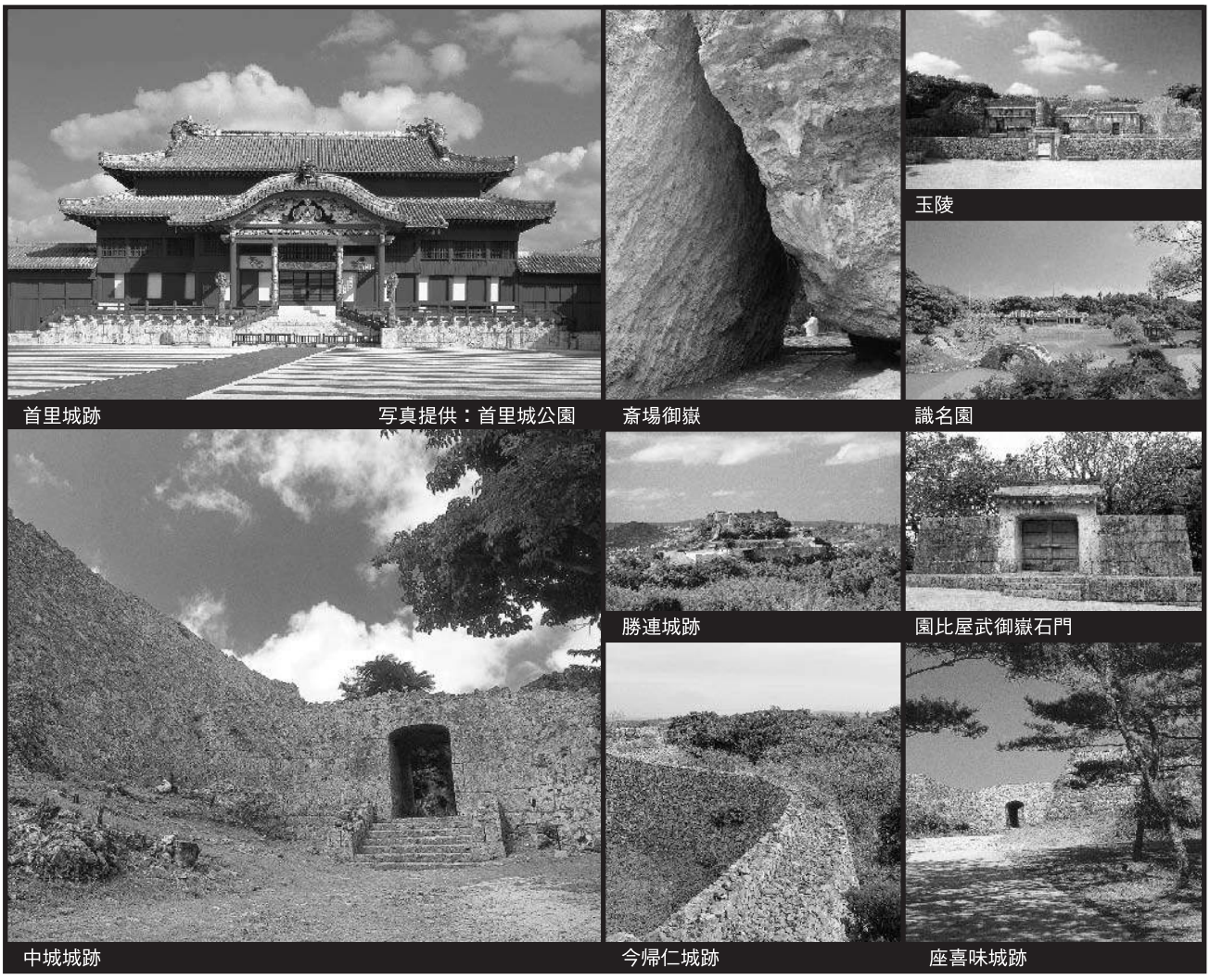
［評価］琉球王国の文化は、特別な政治的、経済的環境下において進化し発展を遂げた。このことは、その文化に比類のない特質をもたらした。

C（vi）：顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰又は芸術的、文学的作品と、直接に又は明白に関連するもの。

［評価］琉球の聖域群は、世界の確立された他の宗教とともに、近代においても損なわれずに残っている自然と祖先崇拝の固有の形態をあらわす例外的な事例を構成している。

登録までの経緯

1992年 （平成4）	ユネスコ世界遺産センターの世界遺産暫定リストに「琉球王国のグスク・関連遺産」（当時の名称）として登録。
1993年 （平成5）	世界遺産調整官ヘンリー・クリア博士〔英国考古学者〕が候補のグスク等を視察。
1994年 （平成6）	登録に向けて沖縄県や各市町村担当部署が本格的な準備作業を開始。
1998年（平成10）	登録の前提条件として、文化財本体の周辺に開発等を抑え景観を守り文化財の価値を確保していく、緩衝地帯（バッファゾーン）を設けなければならなかった。 そのため中城村では7月1日付けで「中城村自然環境の確保に関する条例」を公布し、同条例に基づき景観及び環境の保全・保護を図っていく「歴史的文化的景観保護地区」を中城城跡の東側地域に設定した。 その他、県が整備を進めている中城公園の範囲や、北中城村の景観形成地区（荻道・大城）もこの緩衝地帯としての役割を果たしている。
1999年（平成11）	4月沖縄県が世界遺産登録推薦書を文化庁へ提出。 5月に国の文化財保護審議会の承認を受け、外務省を経て6月にユネスコ世界遺産センターに推薦書が提出された。
2000年（平成12）	1月27日～2月1日ユネスコの外郭団体であるICOMOS〔イコモス：国際記念物遺跡会議〕の郭旃氏〔グォ・チャン氏：中国国家文物局文物一処処長〕が来沖し、現地調査を実施（中城城跡は1月29日に調査）し、その評価をイコモスに報告。 3月パリのICOMOS本部で開かれた世界遺産審査会で登録を審査。 6月の世界遺産ビューロー国会議で登録を審査。 12月2日にオーストラリアのケアンズで開催されたユネスコの第24回世界遺産委員会総会で正式に世界遺産リストに登録決定。



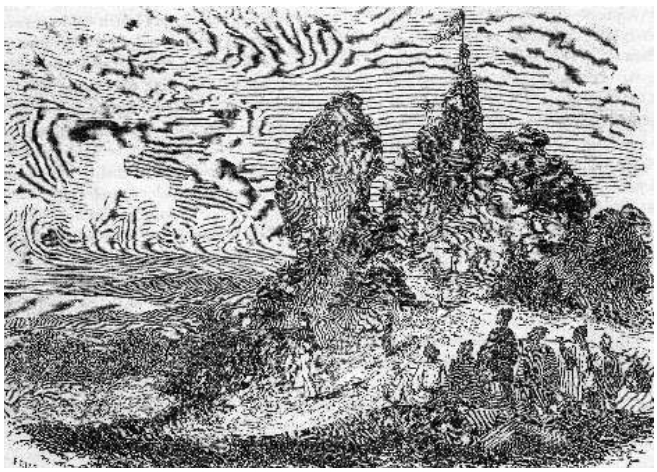
写真提供：沖縄県教育委員会

歴史の道「ハンタ道」整備事業

ハンタ道（歴史の道「中頭方東海道」）は那覇市の首里グスクから西原町の幸地グスク、中城村の新垣グスク、中城グスクを経てうるま市の勝連グスクにまで至る古道で、交通だけではなく物流の道として、また戦略上の道として使用されていました。1458年に起きた琉球史上有名な「護佐丸・阿麻和利の乱*1」や、1853年に琉球に来航したペリー艦隊の琉球奥地探検隊のルートとしても使用され、中城の歴史を語る上でも重要な役割を果たしてきました。

道は丘陵の尾根や崖沿いを通っているため中城では「ハンタ道*2」と呼ばれています。戦前までは道沿に松が群生しており、遠くから眺めると馬のたてがみの様に見えたそうです。

このハンタ道も戦後の開発や自然災害等により急速に失われつつあったため、中城村ではこのハンタ道を破壊から護り、後世に残していくとともに多くの人々に広く利用してもらうため道の整備事業を計画しました。整備に当たっては、都市建設課と教育委員会に整備区間を分けて事業を実施しています。



ペリー探検隊随行絵師ハイネの描いた旗立岩（新垣）

*1 護佐丸・阿麻和利の乱…中城城主護佐丸が勝連城主阿麻和利の策略により亡ぼされた争乱。

*2 ハンタ道…ハンタとは崖っぷち、はしっこ、高所の端などを意味する。



『ハンタ道』沿線概略図

［都市建設課による整備］

稜線を通る坂田(ハンタ)線は、その壮大な眺望景観を生かしながら、南上原土地区画整理事業区間(L=2.3km)と、世界遺産周辺整備事業区間(L＝5.7km)を歩行者専用道路として整備しています。

土地区画整理事業地区内のハンタ線沿道には公的施設である近隣公園（2.0ha）や学校敷地（1.8ha）を配置しており、地区の自然・歴史のシンボル軸を形成するために歴史の道と一体的な整備を行っています。地区内のハンタ線整備の終点から県営中城公園との境界までの区間は、内閣府補助事業である世界遺産周辺整備事業(歴史の道整備事業)にて平成18年度に整備を完了しています。



坂田（ハンタ）線からの眺望



世界遺産周辺整備事業により整備した歩行者専用道路

［教育委員会による整備］

教育委員会が整備する区間は、道の保存状態も良く、周辺に多くの文化財が残っている新垣グスク区間(L=280m)と県営公園内区間(L=380m)です。

教育委員会では、文化庁と沖縄県の補助を得て、平成14～23年度の10ヶ年計画で発掘調査や石畳・石積みの修復等を行う整備事業を実施しています。整備に伴う発掘調査により新垣の根所周辺で13世紀から戦前まで続く集落跡が発見されました。また、整備と関連して実施した新垣グスクの範囲確認調査では、同グスクが14世紀頃に築かれたグスクで、中城城跡より古くなるということも判明しています。

整備はできるだけ元のものを活かし、周辺の文化財や自然環境と調和が取れるように施工しました。



新垣根所前の石畳道（整備後）



新垣のトゥン付近の道（整備後）

［ハンタ道の活用］

現在では道の整備もかなり進み、沿線に数多く点在するペリーの旗立岩や新垣グスクなどの文化遺産にふれながら歴史の道を探訪するイベント等も実施され、地域住民のウォーキングコースとしても活用がなされています。

ハンタ線全線が完成すると、歴史の道である歩行者専用道路（約8.0 km）としては、県内で最も長い道路となり、今後一層の活用が期待されます。

南上原土地区画整理事業

本村の南西部に位置する南上原地区は、琉球大学の移転によって都市的土地利用の動向が活性化してきていました。そのため琉球大学周辺は急速な市街化、スプロール化が進行し、村における土地利用の適正な誘導、及び琉球大学を核とする学園都市としての市街地整備が望まれ、新しいまちづくりの方策として平成四年度から南上原土地区画整理事業がスタートしました。

南上原土地区画整理事業では、南上原地区の自然環境と調和する生活環境をもった良好な市街地整備を目指して、道路やみどりの拠点となる公園施設等の都市基盤を整備しているところです。自然環境を守りつつ、健全な市街地形成を図る本事業は、中城村のまちづくりの先導的役割を担っており、道路や公園等の公共空間のさらなる環境機能の向上を図るとともに、個性と魅力あふれる景観形成を誘導していくことが強く求められてきました。

近年、こうしたまちづくりへのニーズが高まってきたことにより、土地区画整理事業においても魅力とうるおいに満ちたまちづくりを促進するため、「ふるさとの顔づくりモデル土地区画整理事業」の指定を平成六年十一月に受けております。

［地域の活性化］

南上原地区には、元々食料品等の店舗が無いために不便を来していました。しかし、先導的に良好な都市的環境整備を行うことにより、平成十九年五月には県内最大手の量販店が企業誘致用地に開店し、地域住民にも大変喜ばれ、賑わいを見せています。

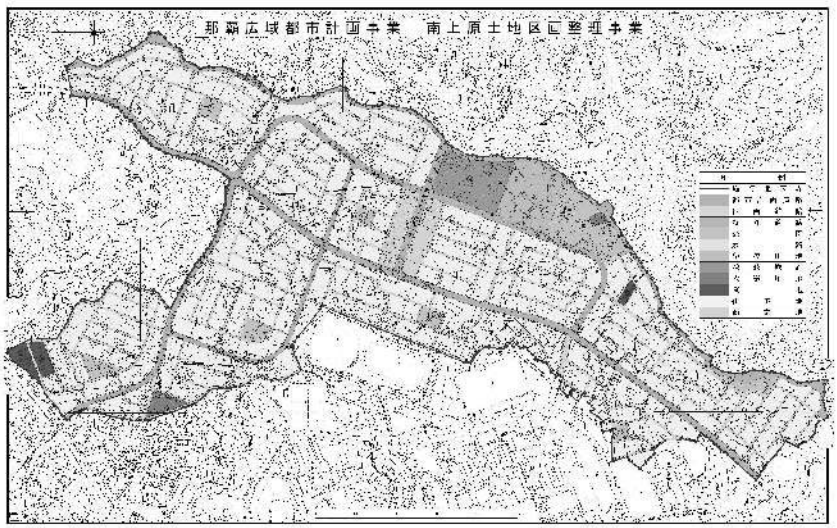
また、不況といわれる状況にあって、南上原地区には高層マンションなどの活発な民間投資が行われ地域が活性化しています。



活性化する南上原地区

南上原土地区画整理事業の概要

名　　称	那覇広域都市計画事業 南上原土地区画整理事業
施 行 者	中城村
都市計画決定	平成5年2月16日
事業計画決定	平成5年3月1日
施行区域	90.4ha
総事業費	174億円
施行期間	平成4年～平成23年
都市計画道路	5,099m
歩行者専用道路	2,360m
区画道路	17,785m
公　　園	8ヶ所（45,259m²）
平均減歩率	30.01％
計画人口	6,300人
建物移転数	建物155戸　墓78基
事業進捗率	平成20年度末67％



［東太陽橋（あがいてぃだばし）］

土地区画整理事業地区内の幹線道路、奥間南上原線（幅員L＝二〇m）は地区外からのアクセス部分が九、一%の縦断勾配であるうえに急カーブとなっています。ハンタ線の平面交差による道路横断は交通安全上問題があるため、人道橋を架け立体交差による整備を行い、南上原地区の顔となるゲートとして、平成十九年度に完成しました。

人道橋の名称を地域住民に募集し、同十月に人道橋「東太陽橋（あがいてぃだばし）」（一日の計は朝にあり朝日を拝み一日の夢を抱く絶好の場所である）の命名式典を行いました。


東太陽橋（あがいてぃだばし）

平成二十年新年には初日の出を拝むために多くの人で賑わい、中城村の絶景スポットとして日々来訪者が東太陽橋からの眺望を楽しんでいます。

土地区画整理事業により整備した歩行者専用道路

南上原地区は中城村第二～第三次総合計画に都市文化交流拠点として位置づけられており、琉球大学と調和のとれたまち並み形成が求められるとともに、中城村の新たな緑住スタイルの居住環境づくり、くらし情報の発信の場としての地区形成が期待され、更に台地部（北上原、登又）地区の今後のまちづくりを展開する重要な地区であります。


整備を終えた歩行者専用道路

中城村人口増加率、県内一位
人口増加率は豊見城市と並び県内一

平成二十一年二月三日に、中城村の住民登録人口が一万七千人を達成しました。浜田京介村長は、「少子化が叫ばれる中での一万七千人の達成はすばらしい。中城村に住みたいという方達の象徴だと思う。」と一万七千人の達成を喜びました。

平成十五年の一万五千人突破から、六年半で、村人口二千人増加を達成し、特に南上原地区では、世帯数七四一世帯、一七四三人の人口増となっています。

中城村の人口増加は、南上原土地区画整理事業による市街地形成が大きな要因といえ、南上原地域では、魅力と活気あふれるまちづくりが進んでいます。

中城城跡整備事業

中城城跡は三〇〇余りあるグスクの中で最も残りの良いグスクとして、また、当時の築城技術の粋を持って築かれたグスクとして知られています。

しかし、築城から長い年月が経つ間に石積みが緩んだり、崩れるなど危険箇所が多くなってきていたためその修復と適切な管理体制の確立が待ち望まれていました。

そのため、中城村では平成四年度に文化庁と沖縄県の補助を得て公有化事業を実施し、民間企業にあった中城城跡の管理運営権を取り戻し、平成六年度には中城村と北中城村で中城城跡共同管理協議会を設置して城跡の管理運営を開始しました。

平成七年度からは文化庁と沖縄県の補助を得て平成三十年度までの三十ヶ年計画で、中城城跡の保存修理事業を実施しています。同事業では発掘調査やその成果に基づく修復工事を実施しており、徐々に危険箇所の修復も進み、発掘調査では多くの成果が得られています。

整備はまず、破損の激しかった北の郭を中心に取りかかりましたが、平成十六年に台風の影響により城の奥にある二の郭と一の郭の城壁が大規模に孕み出してしまったため、急遽整備計画を変更してこれら危険箇所を修復することとなり、平成十七年度に西の郭正門側から二の郭までの間に工事車両用の仮設道路を設置しました。そして、平成十八年度以降はこの仮設道路を利用して二の郭と一の郭の整備を行っており、今後は一の郭と二の郭の整備が終わりしだい南の郭、西の郭、北の郭、三の郭へと整備を進めていく計画です。仮設道路は整備を進めていく中で、必要が無くなった部分から段階的に撤去していく予定です。

発掘調査では建物の柱跡や幼児人骨の埋葬跡等多くの遺構が検出され、遺物も中国製陶磁器、ベトナムやタイの陶器、日本製の武具、地元産の土器などが大量に出土しています。これら出土遺物の年代から城が築かれたのが十四世紀後半頃ということも分かってきており、伝承どおり護佐丸は十五世紀中頃、中城に移ってきて三の郭と北の郭を増築したということを裏付ける結果が出るなど、城の構造や歴史が徐々に解明されてきています。


二の郭での発掘状況


一の郭城壁張出部整備状況


北の郭城壁修復工事中の状況


中城城跡俯瞰写真

吉の浦火力発電所誘致事業

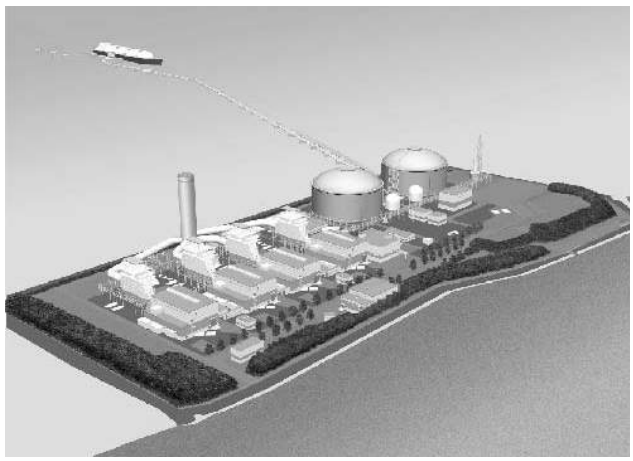
沖縄県本島の長期電力需要は、観光や情報産業を柱とする経済振興が期待されることから堅調な推移が予想されます。電力の安定供給の確保は、経済性及びエネルギーセキュリティーの観点だけではなく、環境にも配慮した電源開発が必要とされていました。

中城村では、沖縄電力への誘致要請を行い、平成十四年に沖縄電力は発電所建設を正式に決定し、平成十九年から本格的な建設工事が行われています。これまで、沖縄電力と連絡会議を開催し、地域住民へ説明会を実施するなど、地域住民の不安払拭、安全対策・環境保全、地域振興事業を実施してきました。

主な経緯

2001. 1.24 沖縄電力（株）から候補地の地質調査申し出
2002. 1.29 中城村長、沖縄電力へ発電所建設誘致要請書提出
2002. 2.28 村及び周辺地域住民中国電力柳井発電所及び新大分発電所視察研修
2002. 3.16 中城村三役及び中城村議会議員事業説明受ける
2002. 3.29 中城村議会発電所誘致決議
2002. 4. 2 中城村議会議長、沖縄電力へ発電所建設誘致要請決議書提出
2002. 4. 6 沖縄電力次期電源開発地「中城村泊が最有力」プレス発表
2002. 4.30 周辺地域へ発電所誘致に関する住民説明会開始（第1回目）
2002. 5.23 周辺地域へ発電所誘致に関する住民説明会開始（第2回目）
2002. 8.1 庁内に「中城村発電所誘致対策プロジェクトチーム」設置
2002. 9.19 沖縄電力による次期電源開発地点に「中城村泊」プレスリリース
2002.10. 4 仮称　吉の浦火力発電所に係る環境影響評価方法書公告・縦覧開始
2002.11. 5 仮称　吉の浦火力発電所に係る環境影響評価方法書公告・縦覧終了
2002.11.15 吉の浦火力発電所予定場所　環境省現地視察
2002.11.28 吉の浦火力発電所予定場所　経済産業省視察
2003. 1.23 県環境影響評価審査会吉の浦火力発電所予定場所視察
2003. 1.30 経済産業省環境影響評価審査会顧問会
2003. 3.16 中城村三役及び中城村議会議員へ発電所建設計画説明
2003. 4.25 中城村発電所誘致対策プロジェクトチーム県内発電所視察研修
2003. 5.29 発電所建設計画住民説明（泊地区）
2003. 5.31 発電所建設計画住民説明（伊舎堂地区）
2003. 5.31 発電所建設計画住民説明（久場地区）
2003. 5.31 発電所建設計画住民説明（添石地区）
2003. 5.31 電源三法交付金制度活用開始（初期対策交付金）年5千万円
2003. 7.29 電磁波等地域説明会（2日間）
2003. 8. 5 村議会議員及び周辺地域代表県外LNG火力発電所視察（2班、73名）
2003. 8.12 中城村商工会会員へ発電所建設計画説明
2003. 9.30 中城村自治会長へ発電所建設計画説明
2003.10.14 村と沖縄電力で定期連絡会開始
2003.10.31 中城村発電所誘致対策プロジェクトチームへ発電所建設計画説明
2003.11. 5 環境影響評価方法書経済産業大臣へ提出
2003.11. 6 環境影響評価方法書公告・縦覧開始
2003.12. 5 環境影響評価方法書公告・縦覧終了
2004. 2.12 経済産業省電力安全課吉の浦火力発電所予定場所視察
2004. 2.27 吉の浦火力発電所立地に関する地元連絡協議会設置（第10回開催）
2004. 3. 7 佐敷・中城漁業協同組合へ発電所建設計画説明
2004. 5.21 発電所建設の進捗状況住民説明（久場地区）
2004. 7. 3 発電所建設の進捗状況住民説明（久場地区）
2004. 9. 1 電源立地推進室設置
2004.11.29 発電所建設に伴う住民説明（泊地区）
2004.11.30 発電所建設に伴う住民説明（久場地区）
2005. 1.24 電源立地周辺地域土地利用計画策定住民説明（泊地区）
2005. 1.25 電源立地周辺地域土地利用計画策定住民説明（久場地区）
2005. 5.10 重要電源促進地点指定の要請（沖縄電力）
2005. 6. 8 吉の浦火力発電所建設計画住民説明会
2005. 6. 9 吉の浦火力発電所建設計画議会議員へ説明会
2005. 9. 1 吉の浦火力発電所「重要電源促進地点」の指定受ける。
2006. 1.11 漁業補償交渉委員会設置
2006. 3.22 吉の浦火力発電所周辺地域協議会設置（電力・村・周辺地域）
2006. 5.31 電源三法交付金制度活用開始（促進対策交付金）総額8億2千8百万円
2006. 5.26 吉の浦火力発電所建設工事に伴う環境保全協定書締結
2006.10.26 吉の浦火力発電所建設工事に伴い工事概要住民説明会（久場・泊地区）
2006.10. 電気事業法第48条に基づく工事計画届出
2007. 2. 吉の浦火力発電所建設工事準備工事開始
2008.11.28 吉の浦火力発電所建工事安全祈願祭

▼沖縄電力吉の浦火力発電所完成予想図



1）吉の浦火力発電所計画の概要

◆ 発電所の名称　吉の浦火力発電所
◆ 所在地……　中城村字泊509番地の2及びその地先（新日本石油（株）沖縄油槽所　跡地）
◆ 原動力の種類……　ガスタービン及び蒸気タービン（LNGコンバインドサイクル発電方式）
◆ 発電所の出力……　251,000KW×4基
◆ 燃料の種類……　液化天然ガス（LNG）
◆ 対象事業実施面積
・対象事業実施区域　約　300ha
・発電所計画地　約 18.6ha
・構外仮設ヤード　約　275ha
・海域
◆ 運転開始予定時期
・1号機　：　平成24年度
・2号機　：　平成25年度
・3・4号機　：　平成28年度以降


島にんじん


菊栽培風景




トマト畑

【農業】

中城村は農業が盛んな村として知られ、サトウキビを基幹産業とし、野菜類、花き、亜熱帯果樹、畜産など温暖な気候を生かした幅広い農業が行われています。近年では、機械化による近代農業、所得向上を目指して平野部では、土地改良事業が行われ、生産性の向上が図られています。また、農業の活性化を図るため、農村環境の整備を推進し、生産組織の育成と担い手農家の育成に努めています。

［漁業］

中城村は、延縄、刺網、定置網を主とした漁業を行っています。平成20年度には、製氷設備も改修され、良質な氷を確保することができるようになったことにより、長時間の水産物の鮮度保持や遠方への輸送が行いやすくなりました。また、沿岸海域の環境特性を生かし、シャコガイの放流試験、タマンの中間育成・放流などの栽培事業にも着手しており、活力ある漁業生産の拡大に努めています。

現在、平成20年度から24年度にかけて浜漁港の再整備事業を実施しています。漁業の安全性と利便性の向上が図られるとともに、外郭・就労施設の整備も計画されており、就労環境の改善も期待できます。



再整備事業中の浜漁港

農業・漁業・観光・商工業



世界遺産群「中城城跡」

【観光】

中城村の観光は世界遺産・中城城跡を中心とする観光が主体であり、中城城跡への入場客数は平成12年以来、平均6万人台で推移するに留まってきました。村内の貴重な歴史文化資源を活かした観光客受け入れ拡充を図るため、平成3年3月策定の中城間切歴史的環境ネットワーク構想・中城城跡公園基本計画に基づく歴史の道整備事業、県営中城公園整備事業及び中城城跡保存整備事業を推進し、村観光の新しいイメージの形成により、中城城跡入場客数15万人を目指しています。

また、特産物開発によるプチ観光客誘致や久場崎地区では、海浜を利用したパラグライダー飛行体験や海水浴等の利用者が年々増加し、観光スポットとして脚光を浴びています。

【商工業】

本村の工業は、都市近郊という特性を背景に早くから工業関連事業所の立地がみられ、中城湾岸地域に散在的に分布してきました。近年、石油製品製造事業所撤退後の跡地利用に積極的な企業誘致を行った結果、電源開発事業所の誘致が決定しています。現在、平成24年度の運転開始を目指し、工事が着々と進行しています。

村内の商業は、食料品小売業を主体としてきましたが、近年、都市近郊性の地域特性を活かした立地条件により大型ショッピングセンターや大型スーパーが進出し、地元及び村外需要に対応した広域買い物拠点を形成しています。

今後とも南上原土地区画整理事業区域の市街化の進展や人口増加が見込まれ、商業活動の発展の可能性が高いものと思慮されることから、村土利用との整合性を踏まえた計画的な商業地形成を図っていきます。



中城村商工会



建設中の吉の浦火力発電所

村内の伝統芸能・伝統行事

～歴史・伝統を守り継ぐ～



伊集のターファークー



字伊集に古くから伝わる中国風の踊りで色鮮やかな衣装を身にまとい、跳ねやひねりの多い振りで荘厳な行列を作ります。十二人の青年のエイサー顔負けのダイナミックでアクロバティックな動きは、観客を魅了し、昭和六十年には県の無形民俗文化財に指定されました。地元ではこれからもベテランの指導者、若い後継者によってしっかりと守り伝えていこうとしています。

津覇の獅子舞

津覇の獅子舞の由来については、いまのところ不明で、一説によると、約五百年前に読谷の長浜から伝わったとされています。毎年旧暦の一月二日、七月十六日、八月十五日に集落の拝所「火の神殿地」で奉納として演じられているほか、村内の祭りやイベントなどでも披露されています。

津覇の獅子舞の最大の特徴は、オス、メスを二頭で踊り分けること。オスは演技の途中で後足の者が前足の者をかたぐるまにして、獅子の二本足立ちをし、これも津覇の獅子舞独特の特徴です。







当間の綱引き

当間の綱引きは、中城殿内の奉公人であった比嘉喜保翁が首里の綾門大綱を観て、これを模して一八八六年（明治十九）旧七月十八日に大綱を演出したのが起源だといわれています。

毎年旧暦の七月十六日に引かれる綱をニーセージナといい、これに対し、卯年、酉年の旧暦七月十八日に引くウーンナ（大綱）のことをマールジナといいます。

区を上下に分けて上が雄綱、下が雌綱を引く。綱が短く重くないこともあり、綱を担いだままカヌチ棒を貫くのが特徴です。

津覇のエイサー

津覇のエイサーの歴史は比較的新しく、一九七〇年頃、青年会の発足と同時期に、具志川市安慶名青年会からの指導を受けて始まりました。「仲順流り」「久高万寿主」「唐船どーい」など沖縄の伝統的な演目を踏襲する一方で、「山村おどり」や「デイゴおんど」など他のエイサーではみられない演目が津覇のエイサーを特徴づけています。



添石の旗頭

去った沖縄戦で焼失し、復活が待ち望まれていた添石の旗頭が、平成十七年に復元。

文献などの資料がなく、首里金城町の「麒麟草（チリントウ）の会」のメンバーの指導を仰ぎ、復元に至りました。

力強い掛け声とドラや太鼓、爆竹を鳴らしながら、「楽太平」「五穀豊穣」と書かれた旗を担ぎ、豊作と区民の安全と平和を祈願します。

中城村には、この他にも和宇慶の獅子舞、旧盆行事として行われるウンケージマなど、地域で大切に受け継がれる伝統芸能、伝統行事があります。

先人たちの残した素晴らしい文化は、今日でも人々の生活の中でいきています。

中城村では、これらの文化継承についても、村民が地域の歴史や伝統を学び継承し、現代の生活と歴史的資源の共生という理想的な姿を想像していきます。

またそれらを通じて、浮かびあがる「中城らしさ」を村内外にもアピールし、観光ツーリズムの振興へ展開させていきます。



100周年事業
実行委員会

会　長

浜田　京介
中城村長

副会長

比嘉　明典
村議会議長

新垣　敏明
副村長

伊佐　盛信
村教育長

監　事

新垣　吉孝
村老人クラブ　会長

比嘉　光子
村婦人会　会長

委　員

多和田　眞吉
自治会長会

友寄　新也
村青年連合会

比嘉　良明
JAおきなわ中城支店

安里　英一
佐敷中城漁協中城支所

幸喜　良男
村商工会

新垣　宗徳
村文化協会

新垣　勇
村子供会育成連絡協議会

與儀　弘
村教友会

伊佐　正一
グスクの会

比嘉　和枝
村PTA連合会

編集後記

明治41（1908年）年4月1日の町村制施行により中城村が誕生してから、今年で一世紀が経ちました。

中城村は、世界遺産中城城跡をはじめとする歴史的・文化的遺産と豊かな環境に恵まれ、教育・文化・生産振興への意欲に満ちた堅実な村民性が原動力となって、着実な発展を遂げて参りました。

村制施行百周年にあたり、実行委員会を組織し開催された「笑顔が戻った日in中城」写真展では、村民を始め県内外を問わず多くの来場者が詰めかけ、大盛況の写真展となりました。

また、実行委員会では、二つめの事業といたしまして、村制施行百周年記念誌を発行することになりました。

中城村、沖縄県が歩んできた波乱に富む時間の流れすべてをわずかな文章や写真だけで伝えることはできませんが、中城村の百年の軌跡をお年寄りから若者まで読んで本村の歴史に理解を深めていただくと共に、次代の中城を展望する縁となれば幸いです。

最後になりましたが、記念写真展、記念誌発行と村制施行百周年記念事業にご協力いただきました、村民の皆様を始め、関係者各位に対しまして、深く感謝を申し上げます。

村制施行百周年記念事業実行委員会

追　伸

写真の撮影場所、年代、説明につきましては、正確を期するよう努めましたが、なにぶん古い写真の中には手がかりが少ないものも多く、誤りについてはご容赦くださいますようお願いいたします。

主な参考資料・文献

- 中城村史
- 琉球･沖縄史 沖縄歴史教育研究会
  新城 俊昭：著
- 広報なかぐすく

写真提供

- 中城村教育委員会
- 沖縄県教育委員会
- 首里城公園
- 知念　清

中城村制施行100周年記念誌 百年の軌跡

Nakagusuku village ◆ 100th Anniversary

発　行　日　平成21年3月

企画・編集　中城村役場企画課
〒901-2493
沖縄県中頭郡中城村字当間176番地
TEL.098-895-2131（代表）
FAX.098-895-3048
URL http://www.vill.nakagusuku.okinawa.jp

制作・印刷　株式会社近代美術
〒901-1111
沖縄県南風原町字兼城206番地
TEL.098-889-4113（代表）
FAX.098-889-8484

100

1908−2008

中城村制施行100周年記念誌

Nakagusuku village ◆ 100th Anniversary



中城村